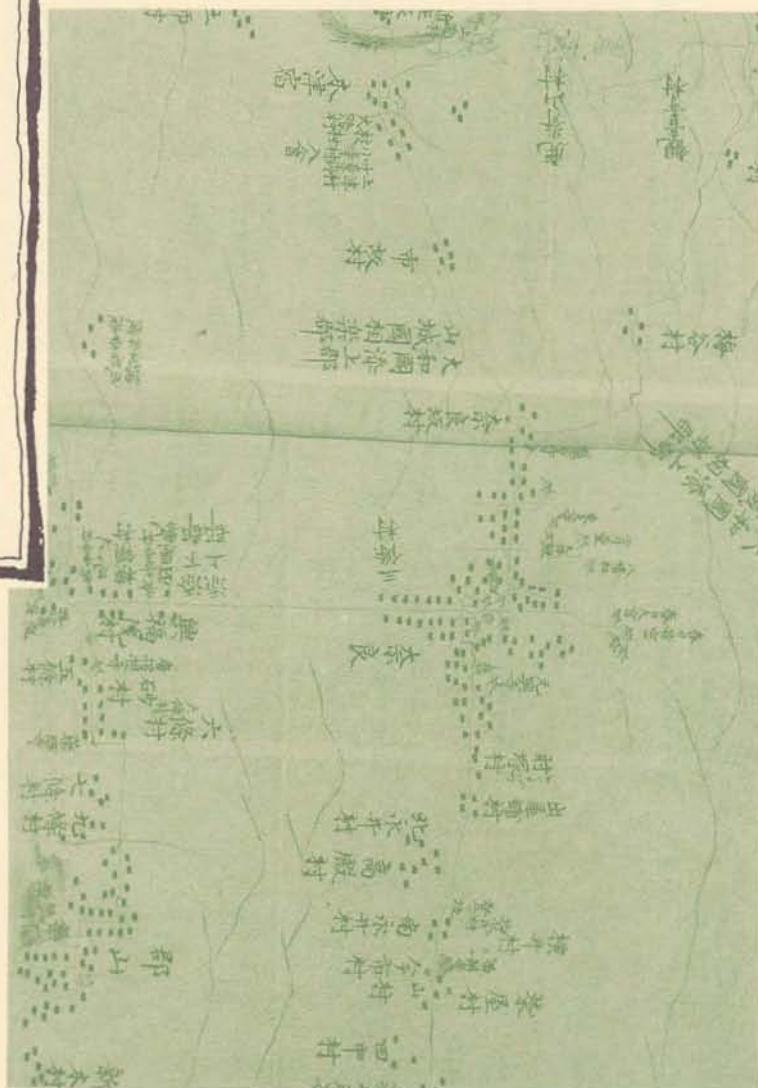


伊能忠敬研究

二〇〇三年第三二号

史料と伊能図



伊能忠敬研究会

## 表紙図解説

米国議会図書館蔵 伊能大図一三四号の部分「奈良」付近

第六次測量で測られた奈良市の付近である。伊能隊は大坂から生駒越えをして奈良平野に入り、当麻寺まで南下したのち、反転して郡山、西大寺を経て奈良の町に入つた。入り口で測量を中止し、奈良奉行に届けたあとで町内の測量をおこなつた。奈良は幕府領で江戸から派遣された旗本の奈良奉行が支配していた。

春日大社、大仏殿への測線が見えるが、一の鳥居あるいは山門まで測つて測量をおわつた。翌日は観光のため測量を休む。袴をつけて、まず春日大社に参拝、宝物の鎧兜などを参観、東大寺の八幡宮、二月堂、三月堂、大仏殿に参

詣したあと、東大寺勧進所竜松院で宝物を拝観する。ついで東金堂、南円堂、北円堂などを廻つた。このときの拝観記を忠敬は『大和靈宝記一巻』にまとめている。

春日大社、東大寺、大仏殿など屋根しか描かれておらず、郡山城の描写と較べると大変簡単である。文化六年に作られた奈良の大図が伊能忠敬記念館に伝えられているが、風景は確かに華麗である。最終本の原図はもつと細緻だつたと思われる。この部分を写した画工は社寺には関心がなくて、かなり簡略化された感じである。他の大図と同様民家の屋根は描かれず、四角な印が連続している。

アメリカ大図展のための複製図では、本図には伊能洋氏らの手により、山景、水路に着色する予定であり、ぜひ御覧頂きたいと思っている。

(題字は伊能忠敬の筆跡)

(渡辺)

## 目次 32号

伊能忠誨(たののり)日記の連載について

伊能忠誨日記(一)

## トピックス

「子午線の夢」三条市で上映会

学習院大学の伊能図がネット公開

初詣と伊能忠敬

伊能図書館に「史跡めぐり」を開設

伊能忠誨記念館に「史跡めぐり」を開設

芳名録より

署名解説のお願い

## 研究ノート

『伊能家文書紹介23』

高橋景保「御用日記」より

東大総合図書館蔵伊能忠敬測地原図

伊能図における経線のズレについて(一)

## 地域史料紹介

篠山領追入本陣の事前準備

岩城島の伊能測量文書(二)

忠敬談話室だより・伊能測量の歌

日々の話題・お便りから  
お知らせ・伊能忠敬記念館・収蔵品展開催

総会・例会の開催  
大阪旅行会の案内

特報・アメリカ大図の着色作業開始

(入会案内・編集後記)

編集部

六八

渡辺・渡部

六七

伊藤栄子

六六

横川淳一郎

六六

渡辺・渡部

六二

伊藤栄子

六二

前田幸子

二二

伊能陽子

一八

垣見壮一  
齋藤仁  
待野貞雄  
前田幸子

八  
一二  
一六  
二二

佐久間達夫  
佐久間達夫  
佐久間達夫  
佐久間達夫

四  
一

## 伊能忠誨日記の連載について

いのうただのりにつき

伊能忠誨は、忠敬の孫にあたり、忠敬が全国測量中の文化三年（一八〇六）に、景敬<sup>かげたか</sup>とリテとの間に生まれ、忠敬がもつとも将来を楽しみにし、手ばなしの愛情をそそいだ人である。

忠誨は、江戸にて、伯母の妙薰<sup>みょうくん</sup>（忠敬の長女・稻<sup>いね</sup>）に育てられ、祖父忠敬の跡をついで天文測量の道に進もつと、高橋景保<sup>かげや</sup>について学問に励んだが、文政十年（一八二七）二月一二日に、二三歳の若さで没した。

この日記は、忠誨が一五歳の文政二年三月より、同九年九月までについて記したもので、忠誨の江戸、佐原での生活の様子や、長女・貞の出生・死去、忠誨の命名の経緯、忠敬の肖像画の表具の依頼、伯母妙薰の死、大日本沿海輿地<sup>よ</sup>全図の幕府上皇の様子等が記されていて、忠敬の生涯を知るためにも貴重な史料である。本号より連載をはじめさせていただくことにする。

原文は漢字と片仮名で記述されているが、本文では、片仮名をひら仮名で表記し、天気のみ記述日などは省略した。

六日	晴天
七日	雲天
八日	晴天
九日	晴天
十日	晴天
十一日	晴天
十二日	晴天
十三日	曇天
十四日	曇天

伊能忠誨日記  
佐原市・伊能忠敬記念館蔵

佐久間 達夫

送 伊能君之東都序

(佐原市所藏・伊能忠敬記念館保管)

○久保木清常が忠誨の江戸へ出発に際して贈つたことば

伊能君之東都序  
伊能君將之于東都。予言之。曰。乃祖、向在郷里、  
予郷里撫排家事克謹克儉、弘產積  
財、或有飢荒之艱、則恵施而救疾苦、  
而鄉黨有來歸者、則與之錢穀而賑之。  
生産日厚、家事歲優、又性好學、雖鞅掌之際、  
不怠日積其精、既及知命年、屬家產于乃父、去遊于東都、見高橋東岡先生、  
于乃父去遊于東都、見高橋東岡先生、  
李東壁之術、偶遇

國家撫養夷俗之時、以測量輿地之事、而  
予選抽稟命赴于夷域、作地圖而上之。  
自是累年有命選行郡國、歷涉遠  
嶺、凌洪濤、攀嶮巖、陵洪濤、雖  
謹命服事、殆二十年、竟成其功、是非氣  
滿志、浮面供奉者、則不能矣、不怠日  
不謂大業也、義奉奉而增、遭斯虐疾、遂  
不起、然地圖之功未全成、以故不載、發  
表于史、第子就業如在日、能成其功而  
上之、實文政四年七月矣、即告官發表請免、  
宣長吏請免。

送

伊能君之東都序

伊能君將之于東都、予言之、曰、乃祖、向在郷里、  
按排家事、克謹克儉、弘產積材、或有飢荒之艱、則能  
施而救疾苦、隣里鄉党、有凍餒者、則與之錢穀、而賑之。  
其生矣、生産日厚、家事歲優、又性好學、雖鞅掌之際、  
纔得閑、則玩經籍、樂詞藻、孜孜不怠、日積其精、既  
及知命年、屬家產于乃父、去遊于東都、見高橋東岡先  
生、學象緯之術、偶遇國家撫循夷俗之時、以測量輿地之  
事、而所選抽稟命、赴于夷域、作地圖而上之、自是累  
年、有命、巡行郡國、歷涉近遠、攀嶮巖、凌洪濤、雖  
屢遇危艱、晏勉而不怠、謹命服事、殆二十年、竟成其  
功、是非氣滿志、而能養其性者、則不能矣、實可不謂  
大業也哉、畢事而帰、遭斯虐疾、遂不起、然地圖之功、  
未全成、以故不敢發表、屬史弟子、就業如在日、能成其  
功、而上之、實文政四年七月矣、即告官發表請免、

國家大矣功情與立使吾子承也称姓佩

刀且燭以布青之鄭子之榮可仰可慕  
易於是遠遠鄉黨三族故舊聞之者益  
不歎竹者錄珠族者稍之聞之又皆慶  
寶故賛焉雖然足皆乃祖勤儉之德所  
以使然也子充勤矣今每赴于東都皆  
就空夫東都者天衢之地矩折謂築不  
足其人天文音集素有高師吾子充懲  
而不解或勿陷布牛之俗勿貲豪虎之  
慾嘆法父祖之所行慎修儉德以期其  
成詩曰無念角祖聿脩厥德吾子居其  
嗣後不幸間過庭之訓乃祖之盛在美  
猶故然

國家之寵恩紙父祖之榮猷成其行無隨  
鄉里之譽則三族是欽朋友故舊相共  
慶先榮無往及吾子之喪也物乃祖之行  
國家之寵恩以為之言子其猶勤矣哉

文政四年冬念一日

國家、大其功、惜其死、使吾子、永世称姓、佩刀、且  
賜以市井之酈子之榮、可仰可美焉、於是遠近鄉党、三  
族故旧、聞之者無不歎欣者、雖殊族者、稍々聞之、又  
皆慶賀欣賞焉、雖然、是皆乃祖勤儉之德所以使然也、  
子克勤哉、今再赴于東都、將就學、夫東都者、天府之  
地、經術詞藻不乏其人、天文曆算、素有其師、吾子克  
懲而不懈、戒勿陷市井之俗勿慣靡麗之態、唯法父祖之  
所行、慎修儉德、以期其成、詩曰、無念爾祖、聿脩厥  
德、吾子居其嗣、雖不幸闢過庭之訓、乃祖之監、在羹  
瀆、謹戴國家之寵恩、繼父祖之業、能成其行、無隨鄉  
里之營、則三族是歡、朋友故旧相共慶、光榮無涯、及  
吾子之去也、聊述乃祖之行与國家之寵恩、以為之言、  
子其往、勤戒哉

文政四年孟冬念一日

窪木俊  
敬白  
印

注・窪木俊は、窪木俊蔵のこと。久保木清淵の長男。

と表記したようです。（久保木家の現当主の話）

一字にしたそうです。それにならって『久保木』を『窪木』

卷之三

# 伊能忠誨日記（一）

佐久間達夫

文政三庚辰歳 伊能忠誨一五才

## 三月 小

朔日 丁巳。朝雨天、四半時後風、寒し。  
二日 薄曇。紙屋新五郎、持田兄弟同道来る。算（術）稽古。申時後雨。持田勝三郎、是より毎日来る。持田勝助は一、三日來り。  
四日 朝雨天、四半時後晴天。九半時後曇天、七ツ時より晴天、風寒し。伯母（注1）浅草へ行く。  
五日 晴天、昼前寒し。伯母向嶋へ行く。保木敬藏（注15）須藤甚右衛門（注24）へ行く。六時廻状来る、石渡鑑太郎方より至来。  
（廻状文略）  
六日 薄曇。予、信田権右衛門と相見に行く。保木又須藤へ行く。予疵癒（しゆ）  
七日 土用事已一刻、晴天。保木、大沢権右衛門へ行く。伯母、紙屋庄蔵へ行く足立重太郎（注21）来る。三宅八郎左衛門来る。  
八日 甲子。上弦申六刻、晴天。東土川（としかわ）の叔父豊田（注13）に來りし由故に予豊田へ行く。  
九日 雨天。伯母紙屋新兵衛へ行く。三宅来る。  
一二日 薄曇。予佐藤へ行く。伊八（注5）来る。  
一三日 小雨。伊八、大沢権右衛門へ行く。三宅来る。予と伯母、源空寺及び足立、高橋侯（注23）へ行く。  
一四日 雨天。今夜紙屋の内義来る。伊八来る。  
一五日 曇天。下女はつ宿より来る。長居す。  
一六日 望西（とり）九刻、晴天。伯母紙屋新兵衛へ行く。予、川口勝次郎（注16）と芝居へ行く。八ツ時後曇天。

一七日

薄曇。伯母桑原（注4）へ行く。足立重太郎来る。下總國中村の左内来る。大野弥三郎（注22）来る。

一八日

雨天。足立長篠（ちようせん）の弟子玄修来る。市野金助（注17）来る。

二〇日

薄曇。紙屋の内義来る。柏木乙右衛門（注3）来る。大川治兵衛（注10）来る。六時後廻状来る。

二一日

八十八夜、小雨。四ツ時後より薄曇八ツ時後より晴天。大野弥三郎来る。

二二日

晴天。安岡玄修来る。

二三日

下弦亥九刻、曇天。大坂町、樽屋藤兵衛の妻来る。紙屋の内義来る。九時より小雨。

二四日

大曇。足立長篠来る。朝五時は庚辰年、庚辰月、庚辰日、庚辰刻に當る。歳徳尊神を祭る開運吉日也と云。

二五日

晴天。安岡玄修来る。伯母桑原へ行く。

二六日

薄曇。桑原隆朝来る。天満屋長兵衛来る。保木、松浦侯へ行く。

二七日

晴天。半兵衛の妹、姪来る。保木、高橋侯へ行く。

二八日

晴天、八半時後より薄曇。桑原隆朝奥方来る。保木、松浦侯へ行く。

二九日

薄曇。桑原隆朝来る。天満屋長兵衛来る。保木、松浦侯へ行く。

## 四月 大

朔日 丙戌、朝曇天四時頃薄曇、七時後雨天。  
二日 朝雨天、九時後曇天。樽屋藤兵衛来る。  
三日 朝晴天、四半時小雨。伯母相見に行く。高橋侯来る。  
五日 晴天。桑原隆朝来る。九時前より薄曇。竜ヶ崎の松田丈右衛門（注2）の女房、娘来る。  
六日 大曇。紙屋の内義来る。紙屋の新兵衛来る。予、紙屋へ行く。朝薄曇後曇る。八半時より雨。大坂町の樽屋藤兵衛の妻来る。持田勝三郎の母来る。三宅来る。

八日 薄曇。樽屋藤兵衛の妻来る。安岡玄修来る。予は薬師へ行く。

九日 上弦已六刻薄曇、九時後より雨。下駄屋松斎来る。予、大野弥三郎へ行く。

一〇日 朝薄曇、四時後曇天。伯母歯医者又、桑原へ行く。

一一日 小満戌九刻、五時前雷鳴雨、五時後晴天、八時前薄曇。大須賀伊八来る。

一二日 晴天。予、大野弥三郎へ行く。伯母紙屋新兵衛へ行く。尾張町の兼（カネ）と娘来る。

一三日 晴天。祖父（忠敏）三年忌也。伯母、予、紙屋内義、坂部の妹、竜ヶ崎松田の女房、娘、箱田（注18）等源空寺及び浅草観音、又両国開張へ行く。七ツ時後雨雷鳴。

一四日 晴天。紙屋の内義来る。保木、松浦侯へ行く。予、大野弥三郎へ行く。

一五日 晴天、八ツ時後薄曇、七ツ時前曇天。伯母歯医者及び紙屋へ行く。又伯母と松田丈右衛門娘紙屋へ行く。

一七日 望卯（2）九刻、晴天、七時後曇。持田勝三郎病氣平癒来る。

一八日 晴天、九時後曇天。樽屋藤兵衛の妻来る。

一九日 小雨、九時前薄曇。紙屋の内義来る。伯母紙屋へ行く。

二二日 薄曇。伯母歯医者へ行く。伊八来る。紙屋内義と庄藏妻来る。

二三日 薄曇。桑原隆朝の奥方来る。大野弥三郎来る。

二三日 退下弦寅四刻、雨天。松田のセヲ、屋敷へ引越し。紙屋の内義来る。樽屋藤兵衛来る。桑原隆朝来る。

二四日 曇天。予、渋川（注14）へ行く。

二五日 雨天。松平睦奥守候初入部。三宅八郎左衛門、古橋忠左衛門、滝権次郎来る。

二六日 雨天、四時後曇天、六ツ時後晴天。半兵衛、竜ヶ崎へ行き、又、佐原へ使者に行く。松田の女房帰る。桑原隆朝入来。紙屋の内義来る。

二七日 芒種丑五刻、入梅。薄曇、四時前より晴天。伊八来り泊る。野茂右衛門来る。伯母紙屋新兵衛へ行く。

一八日 雨天、九ツ時後薄曇、六ツ時後雨天。上総の飯高惣兵衛（注12）の母、弟、妹来る。

二九日 雨天、四時後薄曇、八時後大曇、七時後雨天。伊八帰る。伯母紙屋へ行く。保木、足立左内へ行く。足立重太郎来る。

三〇日 薄曇、六時前より晴天。樽屋藤兵衛の妻、弟、伊八来る。紙屋の内義来る。大野弥三郎来る。リキ、小舟町へ行く。

五月 小

一 日 涼日 丙辰、四時後薄曇。九時後地震、八時後晴天。坂部八百次（注19）帰る。去年一二月二六日より坂部家内來り泊り居す。大野弥三郎来る。

二 日 大曇、四時後薄曇。坂部家内の者帰る。桑原隆朝の奥方、娘来る。

三 日 薄曇、九時前より晴天。大野弥三郎来る。

四 日 薄曇、四時後晴天、六時後風。足立重太郎来る。

五 日 薄曇。予と伯母高橋侯へ行く。信田平吉来る。永沢半十郎（注7）来る。

六 日 薄曇、九半時後晴天。信田平吉と権右衛門来る。永沢藤次郎（注6）永沢半右衛門（注8）の母来る。

七 日 晴天、五時前より薄曇。上総屋甚左衛門来る。桑原隆朝来る。

八 日 退上弦寅四刻、曇天、四時後薄曇、六時後雨天。伊八来る。

一〇日 雨天。桑原隆朝入来。

一一日 薄曇、七ツ時後曇天。大川治兵衛来る。高橋侯入来。

一二日 夏至辰一刻、雨天。樽屋藤兵衛の妻来る。

一三日 曇天、四時後薄曇。紙屋庄藏の妻来る。紙屋新兵衛来る。大野弥三郎来る。伯母桑原へ行く。予、源空寺へ参詣に行く。樽屋藤兵衛の妻来る。

一四日 薄曇、九時後雷鳴大雨。伯母源空寺及び足立佐内へ行く。上総屋甚左衛門来る。

一六日 望申五刻、雨天。予、青雲堂へ行く。桑原隆朝来る。  
 一七日 雨天、四時より曇天。子刻前地震。  
 一八日 小雨、九時後曇天。桑原隆朝の娘来る。  
 一九日 朔雨天、五時前より雨天、八半時後曇天。佐原の天満屋長兵衛来る。  
 二二日 半夏至、雨天。天満屋長兵衛、子セ来る。同人深川へ行く。  
 二四日 曇天。天満屋長兵衛、子セ来る。長兵衛帰る。  
 二五日 雨天。チセ、行徳川岸へ行く。  
 二六日 雨天。桑原隆朝娘来る。八時後曇天、六ツ後晴天。  
 二七日 小暑、午七刻雨天。上総屋夫婦来る。女房は泊まる。チセ来る。  
 二八日 薄曇、八時前より小雨、八時後薄曇。上総屋甚左衛門妻帰る。  
 二九日 雨天、九時前より薄曇、八時後より曇天。渡辺啓次郎（注20）来る。  
 一六日 望夜、子五刻。チセ帰る。  
 一七日 伯母、白木屋へ行く。  
 一八日 清藏改め渡辺犀輔来る。紙屋新兵衛来る。  
 一九日 久保木佐右衛門夫婦来る。紙屋新兵衛来る。  
 二〇日 桑原隆朝入来。伯母紙屋へ行く。  
 二三日 下弦未九刻。坂部八百次死去の由、聞く。  
 二六日 箱田左太夫、坂部へ行く。  
 二七日 予、坂部へ行く。虫干したんす白木屋へ預ける。  
 二八日 立秋、亥九刻。上総屋甚左衛門死去の由、聞く。  
 二九日 天満屋佐兵衛の女房、長兵衛来る。  
 三〇日 久保木俊藏（注25）来る。

六月 大

二日 樽屋藤兵衛の女房来る。松田セラ屋敷を下る。  
 三日 伯母、桑原へ行く。樽屋の女房来る。桑原の娘、子息来る。  
 六日 セラ来る。  
 七日 桑原の奥方来る。セラ帰る。  
 八日 桑原隆朝来る。  
 一〇日 土用事、申八刻。渡辺啓次郎来る。  
 一一日 紙屋新兵衛来る。  
 一二日 永沢太兵衛（注9）来る。  
 一三日 大暑酉四刻。予、伯母源空寺及び足立、坂部、高橋侯へ行く。  
 の三年忌也。  
 一四日 久保木佐右衛門（注11）来る。  
 一五日 予、保木祭礼見物に行く。久保木佐右衛門夫婦、リキ、チセ見物に行く。箱田も行く。山王（日枝神社）御祭礼也。

七月 小

朔日 乙卯、晴天、南大風。桑原隆朝夫婦来駕。  
 二日 松田セラ来り居る。紙屋新兵衛妻来る。桑原隆朝奥方来る。  
 三日 永沢仁兵衛来る。  
 四日 予、結城屋へ行く。永沢仁兵衛止宿故久保木俊藏来る。予、紙屋新兵衛より永代大橋辺涼しに行く。  
 五日 久保木俊藏帰る。雷鳴。  
 七日 予、源空寺及び足立左内、高橋侯へ行く。  
 (つづく)

注 1 伯母妙薰（一七六三～一八二二）  
 忠敬の長女で、夫死後、剃髪して妙薰と名乗る。  
 注 2 松田丈右衛門光遠（一七八四～一八五七）忠敬の三女琴の夫で、常陸国竜ヶ崎（現茨城県竜ヶ崎市）の庄屋であつた。琴（一七八九～一八六五）は、度々、江戸の忠敬や忠謙宅を訪れ、七七才で病没した。

注 3 柏木乙右衛門 忠敬の内妻の親族。

注4 桑原隆朝如則 二代如宣（一七四四～一八一〇）の嫡子。忠敬の妻・信ときょうだい。養好ともいう。

注5 大須賀八郎右衛門伊八（一七九六～一八二五）伊能家四代景善の三男八郎兵衛が、佐原村寺宿に分家した家の子。大須賀家を興し、伊能家の使用人をしていたが、三〇才で没した。

注6 永沢藤次郎恭寛（一七六五～一八三四）

義父藤次郎保高は、忠敬の郷里に近い上総国借毛村であつたので、

永沢治郎右衛門征俊の娘婿になり、第五次測量に参加する。恭寛は、永沢半十郎久則の第三子で、幼名を半十郎といい、藤次郎家を継ぐ。

注7 永沢半十郎久芳

祖父久則は、香取郡南中村の平山治兵衛有則の子で、永沢治郎右衛門俊順の娘婿となる。久芳は、天保九年六月一八日没。

注8 永沢半右衛門俊世

祖父俊将は、伊能三郎右衛門家五代景知の二男景寿（永沢治郎右衛門の娘ちよのの婿）の三男である。俊世は俊将の子・俊清の子。

注9 永沢太兵衛 永沢治郎右衛門の一族。

注10 大川治兵衛成頸（一七八五～一八五四）

成頸は、津宮村（現佐原市津宮）の人。伊能家の帳元締をやつて、成定（一七五二～一八一〇）の娘婿で、嘉永七年に七五才で病没した。生家は、常陸国古渡村の小川弥右衛門。

注11 久保木佐右衛門

津宮村の人で、長持宰領として、六次、八次測量に参加する。

注12 飯高惣兵衛尚義 忠敬の朋友であつた飯高惣兵衛尚寛（文化二年没）の孫で、幼名を吉太郎、長して惣兵衛君齋といった。尚義の父は、（貢兵衛）で、その妻は、尚寛の娘千枝である。

注13 豊田伊右衛門 江戸北町奉行組与力給知上総在府代官。

高橋至時の二男で、初め高橋善助と称した。天文方渋川富五郎正陽

の養子になり、通称を助左衛門といった。第五次測量に参加。

注15 保木永晉 通称を敬藏といい、忠敬の内弟子として、第八、九、

一〇次測量に参加する。忠敬没後も地図作成に関与する。

注16 川口春興 通称を勝次郎といい、後に源次という。高橋景保の手付下役として、地図作成に関与する。

注17 市野茂喬 通称を金助といい、高橋景保の手付下役として、第五次測量に参加する。

注18 箱田眞与 通称を良助、後に佐太夫と改める。忠敬の内弟子として、第七次～一〇次測量に参加する。忠敬没後も地図作成に関与する。

注19 坂部弘道 通称を八百次という。第九次測量に参加する。坂部貞兵衛の体である。

注20 渡辺慎（尾形慶助） 通称を敬助、慶助、頸次郎、啓次郎などといふ。尾形姓で忠敬の内弟子となる。第一、三、四、八、一〇次測量に参加する。後、渡辺氏を継ぎ、地図作成に関与する。

注21 足立重太郎信順 通称を内信頭（一八四五年七七才没）の体で、天文観測では江戸暦局有数の人であった。父に先立つて一八四一年に四六才で病没する。

注22 大野弥三郎規行 江戸神田松枝町に住み、忠敬、忠講の天文観測や測量器具を製作する。

注23 高橋作左衛門景保 天文方で、忠敬の全国測量や地図作成の監督をする。

注24 須藤甚右衛門 小普請組の世話係。

注25 久保木俊藏 伊能忠敬の漢学の師、久保木清淵の長男で幼名俊藏、諱（いみな）清常、号梅山といった。父清淵とともに「大日本沿海奥地全図」の作成に協力する。忠誨が、江戸に登るにあたつて「序」を贈つてある。

この「送・伊能君之東都序」は、国的重要文化財に指定され、佐原市の伊能忠敬記念館に保管されている。

『子午線の夢』三条市で上映会

県内初の上映会

雪割草・福寿草の花が開き越後平野にも浅い春が来ました。

三条市での「伊能忠敬」映画上映の結果を報告します。

垣見壯一

映画「伊能忠敬」—子午線の夢—報告書

# 伊能忠敬

2003年2月23日(日)  
三条市中央公民館 大ホール



「後細見図」等が好評で驚きました。

報告書と三条新聞の記事などご覧いただき、「伊能忠敬」の足跡のない地方都市での成功には、いろいろな背景があり今後同様な催しに参考になれば幸いです。

支部として展示したのは武揚堂の中図が中心でしたが、伊能図集成等は本を分解して展示しました、今後は展示用の図面があればと提案したいのですが。

新聞に取材をお願いしましたところ、好意ある記事を戴き、それが即、前売券の売り上げの伸びとなりました。

「伊能忠敬・子午線の夢」上映について

三条市中央公民館にて2月23日、映画「伊能忠敬・子午線の夢」が新潟県で初めて上映された。

伊能忠敬研究会新潟支部にも協力の依頼があり、伊能図の複製、関係図書類を土地家屋調査士会の新旧測量器械類と合わせて展示することにした。

三条市は新潟県のほぼ中央に位置する、人口約八万五千人の地方都市である。同市には残念ながら「伊能忠敬」の足跡はなく、資料も発見されていない。

その街になぜ、「伊能忠敬」が登場したのか。誰がどうして呼んだのかと不思議でならなかつた。実際取材を依頼した新聞社の中には、

最初は、そのような地味な記事は一般の人の興味を引くことではないし、話にならないと批判されたようだ。しかし、結果は多くの人から「感動した」「伊能忠敬は素晴らしい人だ」との言葉戴いた。

県民性か、映画の進行と共に喜び、涙を流す人もいたという、上映が終わると拍手がわき起り、私が居た資料展示場まで響き感動した。今後このような催しが計画されたときの参考までにお知らせしておきたい。

この催しは三条市教育委員会が計画し、特定非営利活動法人三条公民も劇場が共催、おやこ劇場のスタッフが各種団体を巻き込み、単なる映画鑑賞会ではないものをと、実行委員会で種々のアイディアを出し宣伝に利用している。測量器械の模型を作る人、測量旗を手書きする人など、特に女性が地方文化の大きな担い手であることを実感しました。

前売券は大人千円、子供五百円だったが三回の上映で六百人を越す入場者を数え、成功裏に終了した。

### 『三条新聞』から

三条おやこ劇場では上映会に向け、丸井今井邸保存会の協力で忠敬が使った測量器具の原寸模型や、忠敬が測量地に押し立てて行つた幕府御用を示す「御用旗」などを手づくりし、伊能忠敬の業績を研究している中蒲・小須戸町の垣見壯一さんの協力で「伊能図」の縮小版や貴重な史料を展示。ほかにも土地家屋調査士会三条支部の協力で、現在の測量器具なども展示した。

午前十時からの第一回上映には三百人が来場。上映前には土地家屋調査士会のメンバーたちが、忠敬が使った測量具を使い、現代の測量

具と比較しながらその使い方を説明してから上映した。

：上映会では、映画が終了するたびに会場から拍手が上がり、見た人々は「感動した。中年の星だ」と感激し、「上映前に測量具の説明があつたから分かりやすかった」という声も多かった。

上映が終ると展示室に足を運び、「伊能図」の縮小版に見入り、新潟の海岸線で「寺泊」などの文字を探していた。：

### 報告書のあとがきから

□この作品と出会って何かを始めるのは年齢ではないことを知りました。多数の人たちのご協力に感謝申し上げます。（川崎光枝さん）

□ひとつぶの雨が、少しずつ集めて小川になり、いくつもの小川が合流して大きな川となつて海へ向つていくようなワクワク感がありました。時々は激流、いい流れに出会えて感謝しています。（兼古和枝さん）

### 三条新聞

2003年(平成15年)2月28日(金曜日) (8)

**伊能忠敬—子午線の夢**

『伊能図』縮小版や測量資料も展示

三条おやこ劇場 県内初の上映会

伊能忠敬の業績を研究している中蒲・小須戸町の垣見壯一さんの協力で、忠敬が使った測量器具の原寸模型や、忠敬が測量地に押し立てて行つた幕府御用を示す「御用旗」などを手づくりし、伊能忠敬の業績を研究している中蒲・小須戸町の垣見壯一さんの協力で「伊能図」の縮小版や貴重な史料を展示。ほかにも土地家屋調査士会三条支部の協力で、現在の測量器具なども展示した。

午前十時からの第一回上映には三百人が来場。上映前には土地家屋調査士会のメンバーたちが、忠敬が使った測量具を使い、現代の測量



堂々たる測量解説



ステージにズラリ並んだ大道具



熱気ムンムンの資料展示室



長い1日を終えて「お疲れさん！」



北極星をのぞきたくなります。



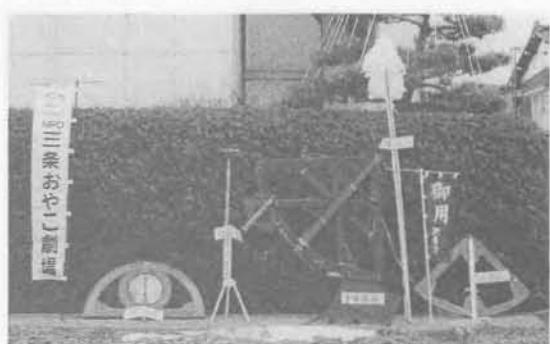
さすが伊能忠敬研究会！



手書きとは思えぬできばえ



目盛りもばっちり正確です。



大役を果たして記念撮影。よくできてます。  
いつでも貸し出しいたします。

□垣見壯一さんのメッセージから  
三条おやこ劇場主催の「子午線の夢」は七百四十枚の前売り券が売れ、当日券も併せ九〇〇人位の入場者とのこと。地方都市の教育委員会の行事としては大成功とのことでした。

併せて展示室に手持ちの地図資料等を展示しました。武揚堂の中岡を展示盤に日本列島形に張り好評でした。特に伊能中岡の原寸複製の本は待つ人の列が出来、美しさに驚いていました。幾人かに購入手段の問い合わせを受けました。伊能図集成大図、伊能忠敬測量日記も知つてゐる地名を探す人も多くいました。

参考資料として伊能蔵の趣後・佐渡測量の解説と会のホームページへジからの宣伝文「なごやかなで気楽な会です」も書き加えた会員募集をパンフレットにして、一〇〇部作成しましたが午前中で無くなり残念でした。

土地家屋調査士会三条支部の新旧測量器具による実演、NPOスタッフによる伊能測量器具の模型の展示、さらに双六、歩幅測定には人が夢中となる場面もあり、協力者一同感激の打ち上げでした。

は、余裕も準備期間もなく心残りのことも多くありました。四月半ばになれば、なんとか余裕が出来ると思いますので新しい活動を考えております。

(かきみ そういういち・新潟県小須戸町)

\*編集部・熱心なご活動に感心いたしております。

三条市の山浦佐智代さんが伊能研究会に入会されました。

映画以外にも盛りだくさんで

「伊能忠敬」上映  
おやこ劇場

2003年(平成15年)3月7日(金曜日) 一

越後守一十九



良實さまを尋ねて

# 学習院大学の伊能図がネット公開

齋藤 仁

学習院大学図書館所蔵の伊能忠敬「大日本沿海輿地図」(伊能図)がデジタル画像として平成一四年度からネットワーク上で公開された。制作にご苦労された学習院大学図書館の担当事務長である中村丈夫氏のお話を紹介し、この伊能図について説明しておきたい。

## 一、電子図書館の伊能図について中村氏の説明から(要旨)

ここでは公開に至るまでの経緯とデジタルコンテンツ化等のシステム的なことをご説明させていただきます。

デジタル化された伊能図は本学電子図書館システムのコンテンツとして登録されています。電子図書館システムは学内情報化整備のひとつとして平成一三年度に導入され、システム構築・テスト期間を経て平成一四年度から本稼動しています。伊能図はデジタル化され、インターネットによって配信されどどからでも画像を閲覧することができます。

大学図書館所蔵の伊能忠敬「大日本沿海輿地図」(伊能図)のデジタル化についてですが、まず伊能図を撮影しそれをスキャニングしてファイルを作成しました。伊能図自体がそれぞれ約100cm×約200cmもあり、地名などの文字は10mm以下と超細密なため、通常に撮影したのではデジタル化しても文字が判読できないため、4×5インチフィルムを使用し接写による30~40分割の多分割撮影を行いました。ここでは後で合成することを考慮し、特に均等な照明を必要とし、また、分割

したずれを防ぐために絵図上数センチに帆糸を張るなどの工夫をして撮影しました。

最初の一枚目をデジタル化して画像を拡大すると文字が僅かですがぼやけるので、すべての絵図を前述のように再度撮影し直すなどの苦労がありました。撮影されたフィルムはスキャニングされTIFF形式にファイル化されます。多分割撮影したのでこれらのファイルを合成して一枚に仕上げるのですが、それに半月から一ヶ月かかりました。完成したファイル一枚当たり2~4GBの大容量になります。MRSIDファイルに圧縮後でも200MB程度はあります。これをコンテンツサーバからクライアントの要求に応じて配信することになります。

このようにして出来上がった伊能図をパソコンの画面上で閲覧するわけですが、ビューワーによって画像の拡大・縮小・パン表示での移動と閲覧者の望みどおりに表示することができますので、全体図の表示から、極細に記載された地名の鮮明な拡大表示までがシームレスに表示できます。また、実際には肉眼でも読み取れないような文字までも画像が劣化することなく拡大表示が可能であり、一般閲覧者から専門研究者まで満足のいく画像閲覧システムが出来たのではないだろうかと考えてています。

ホームページアドレス

<http://www.glim.gakushuin.ac.jp/e1s/e1s.html>

左記の「電子図書館システム GLIM-ELS 一次情報資料検索および閲覧」を選択、表示されたページの「大日本沿海輿地全図(伊能図)」を選択(クリック)。また「統合情報検索システム」からも検索して閲覧可能です。

## 二、学習院伊能中図の内容

学習院大学図書館に保管されている伊能中図は八舗あり、昭和四四年に元学習院女子部教授堀米次氏の寄贈によるものである。

同氏は、これを昭和二十年八月、終戦による陸地測量部の解散に際し、焼却寸前のものを友人であつた山北半次郎氏から譲り受け、入手されたとのことである。学習院では早速装丁を改め、裏打ちし軸装し、桐の外箱を新調して保存の完全化を図かつてきました。

(縦×横の大きさ・cm)

1 蝦夷地 (東南部)	(119 × 198)
2 陸奥・出羽 (北部)	(107 × 184)
3 陸奥・出羽 (南部)・越後・佐渡	(100 × 184)
4 下野・上野・常陸・下総・武藏・相模・伊豆	(113 × 178)
5 能登・越中・信濃・加賀・越前・若狭・尾張・駿河・遠江	(123 × 181)
6 参河・尾張・伊勢・近江・伊賀・大和・紀伊・若狭・和泉・山城・摂津・丹後・播磨・但馬	(120 × 170)
7 因幡・伯耆・出雲・石見・備前・備後・備中・安芸・周防・長門	(125 × 154)
8 阿波・讃岐・土佐・伊予	(99 × 150)

以上の八舗で九州の部を欠いている。

九州測量は第七次文化八年(一八一〇)、第八次文化十二年(一八一五)で学習院図はその前で、原図の制作時期は四国測量後のものと考えられる。

## 三、学習院伊能図の特徴

文化元年の沿海地図中図で現在知られているものは、他に伊能記念

館、国立史料館、徳島大学付属図書館にしかないだけに貴重なものである。学習院中図は江戸時代後期の写本として考えるとしても、針穴は見つからない。裏打ち装丁し直しのため分からなくなつたのかは疑問である。普通は沿海地図の構成は、蝦夷、奥州、中部・関東であるが、学習院中図は奥州を南北に二分して四舗構成になつてある。余白には里程標が示され、全体をそのまま二分してある。蝦夷地の部(一)欄外には高橋景保の織語が載せてある。

文化元年の中部の部(五)と文化四年の畿内の部(六)との接合部分のコンパースローブが内陸部におかれ、尾張(名古屋)付近から知多・渥美半島が重複して描かれている。とくに浜名湖の描写の詳細に差がはつきり出ている。文化四年近畿の部(六)は平野部にピンク系の彩色が用いられ、美しさが出ている。

学習院図の最大の特徴としてあげられるのが、中図でありながら大図の記載内容が記されていることである。側線に沿う町村名はもちらんのこと、幕府名・大名領知行所・社寺領などじつにこまかに細字で記入されている。東大総合研究博物館の大和地方の部分を比較してみると分かる。この見事な細字で、技術的にも時間的にもこんな細かな記入事項を模写するのは、よほど例外的な必要性があり、諸条件が揃つてできることであろう。例えば、全国の所領を総覧してみていたからだろうか。近畿の部(六)の端には、沿海地図の凡例、伊能勘解由謹図の識そのままに写した別紙が貼り付けてあり、末尾には安政五年六月、熊谷市兵衛写とある。地図模写年代はもう少し古いと考えられるが、余白と便利さのため貼り付けたのであろう。

中国の部(七)は、九州測量以前のため中国地方の内陸部は空白であり、ややびしい図となつていて、瀬戸内海側の島嶼の間隙をぬつて境界を設けたので、図の(八)との接合記号のコンパースローブが貧

弱ではあるが描かれている。

#### 四、明治以降

学習院中図八舎には全て「陸軍文庫」の蔵書印があり、一部に消そうとした跡が残っているものもある。

陸軍文庫へどのような経路で入ったか分からぬが、陸地測量部にあつたのは確かである。先述したように、堀教授が陸地測量部の解散とともに友人（同郷）から譲り受けたことになつてゐる。

関東の部（三）には、鉛筆で精密ではないが方眼線が記されていて、いちばん使用したのであらうか、擦れた汚れが目立つてゐる。他にも中国の部（七）の一部と四国の中（八）は、伊予北部の松山・今治・石鎚山にかけて、かなり細かな方眼が集中的に記されている。これも決して精密ではないが、明治以降の複写の方法で、この伊能中図より模写しようとした試みた証拠である。

当時の動きとしては、陸地測量部で三角測量を開始したのが明治六年（一八八三）であり、それまで当面の必要に応ずるには伊能図に頼るほかないと考え、明治五年に伊能家から大・中・小図の副本その他の資料を借り出している。これは当時の工部省測量司の名で借用証書が提出されている事実がある。そして内容の不足部分は天保図などで補い、模写をはじめている。明治一一～一二年に伊能中図と同一縮尺の軍管図が第一から第六軍管区ごとに編修している。しかしこれはもともと陸軍の応急使用のためのものであり、一般社会の利用に供するものではなかつたので、明治一七年から軍管図よりさらに精密な複製二十万分の一地図一色刷の作製にかかっている。一方、海軍水路部でも伊能図を内務省地理局から借り出し模写し、その精密な海岸線に基づいて、海図の作製をはじめている。本図も写図の候補であつた

かもしれない。

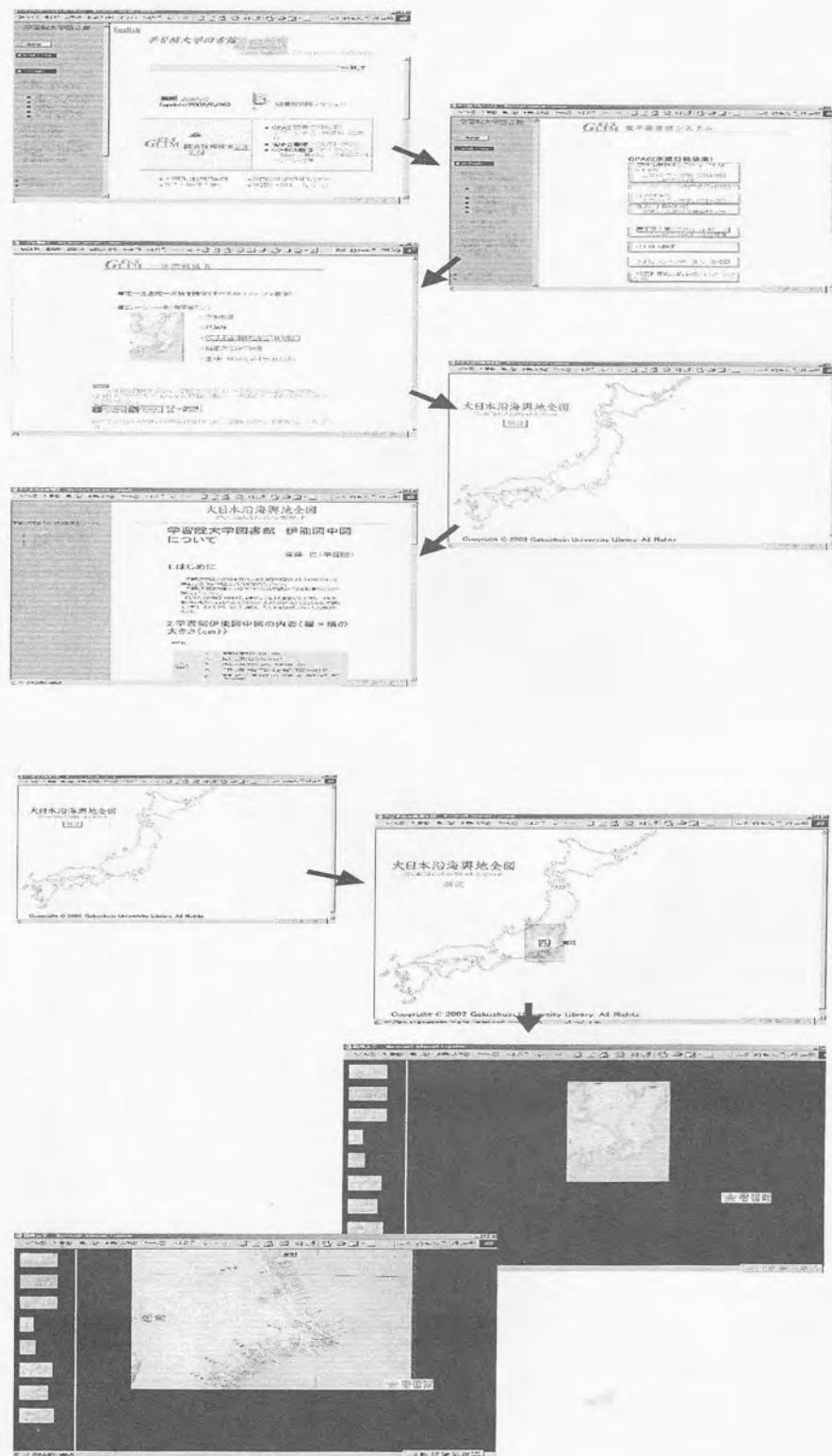
#### 五、おわりに

以上のような伊能図の利用と貸借関係はよく分からぬが、学習院中図が戦前の陸地測量部にあつたことはおそらく、どこの大名家にあつたものが、明治年間に貸し出され、そのまま返却されずに置かれ、終戦直後の混亂により焼却されようとしたものであろう。

甲南大学の久武哲也教授が平成七年（一九九五）一二月、イタリア地理学協会所蔵の日本地図コレクションを調査された際、伊能図を見され、その構成が学習院中図に似ていることから、伊能忠敬研究会の渡辺一郎、清水靖夫両氏とともに来院調査された。その結果、図幅構成はピツタリ同じであった。写真照合では、地名が、位置はそのまままで、国名、郡名まで全てカナに置き換えられていた。学習院中図と原図を同じくする伊能図のカナ書き版がイタリアにあつたということは極めて興味深いことである。



大学図書館



## 初詣と伊能忠敬

待野 貞雄

ところで、一昨年九月、伊能忠敬研究会代表理事の渡辺一郎さんから日調連に連絡があり、伊能忠敬銅像建立を記念して「江戸の伊能忠敬」を発刊するので、忠敬の旧跡を現在地に特定して欲しいとの依頼を受け、東京会の私が担当することになった。

わが家の初詣は、深川の富岡八幡宮である。別名「深川八幡宮」とも呼ぶこの神社は、東京都江東区富岡一丁目にあり、地下鉄東西線の門前仲町から歩いて五分ほどの所にある。

わが家がこの神社に初詣に行く訳は、最寄り駅から電車で一〇分という近い距離にある有名神社であること、また隣の街区には、深川不動というこれも有名な不動様があり、同時に参拝できるという便利な場所だからである。それも元日の午後になる。

この神社には、会員諸兄は既に会報等でご承知のとおり、調査士会員も淨財を寄付した伊能忠敬の銅像が参道の脇にあり、すぐ横に測地2000による最初の国家基準点も設置されているが、元日は銅像の近くに寄れないほど混雑する。

私の大晦日は、午後に孫たちを連れてこの神社と不動様に年納めの参拝に行く。人出の少ない銅像の前で立ち止まって話をしている子供連れを眺めていると年の瀬の喧騒を忘れる。帰りには孫たちの好物の甘栗を買うことにしている。

夜は、すぐ近くにある稻荷神社で年越しの行事がある。家に帰つて寝るのは三時を過ぎているので、当然ながら元日は朝寝。わが家の初詣が午後になるのは、人出の混雑が緩んだ時間と私の都合とが一致するからである。

江戸の忠敬の旧跡といえば、寛政七年（一七九五）千葉県下總佐原から江戸に出て最初に居住したのが深川黒江町（江東区門前仲町一丁目）。ここから高橋至時に師事するため鳥越（台東区浅草橋三丁目）にある司天台に通っている。

忠敬の歩測練習の図によると、自宅から北上して両国橋を渡り司天台、浅草觀音（浅草寺）から吾妻橋を渡り隅田川の東側を両国、白蛇まで歩測の練習を重ねている。この図面には、距離、方位角の記載があるが測量初期の歩測であり、東京都作製の2500分の1地形図と比較して距離で20%短く、角測定の精度も不安定である。仮に一間六尺五寸竿？にしても8%弱。江戸期とはいえ、天文学を学び測量に情熱を傾けた忠敬が、地押丈量まがいの間を使つたとは考えられない。歩測練習の図面は、未熟な歩測で相当の無理をしたのか謎を残している。

その後、文化二年（一八一四）八丁堀亀島町（中央区日本橋茅場町二丁目）に引越してここを地図御用所とし、文政元年（一八一八）この地で終焉した。

これらの場所は、大正一二年（一九二三）の関東大震災による被害を受け、震災復興区画整理事業によつて大幅に地形が変更した地域である。

図書館、本屋を回つて集めた資料を分析した結果、位置特定に使える

る資料の分類は、①結構正確に道路等が描かれている忠敬「江戸府内図」の測量下図。②精度に問題はあるが克明に屋敷名等が記載してある江戸期の絵図。③精度に疑問はあるが江戸期の地形の名残を残す明治期の区画図と地形図。④震災復興区画整理完了後の昭和期（昭和一六年）の区画図。⑤現在の地形図と住宅地図の五種類である。

現地を踏査した結果は、道路の拡幅、橋の架替え等による経年変化が激しい。その上江戸期の絵図と対比し、全体と部分とを理論的に整合させるには無理がある。

位置特定の精度を一〇メートル範囲と目標を定めたが、パソコンによる重ね図を諦め、それぞの地図を縮尺修正して年代順に、また部分的に重ねながら図解的な調製することにした。

その後、伊能忠敬の江戸日記からの新たな情報を得て部分修正を加え、最終報告をしたのが昨年五月の連休過ぎとなつた。

江戸期の絵図面を眺めるだけなら結構楽しいものだが、これを現在に重ねる、現在を江戸期に重ねる、そして部分部分を整合させることは、絵図や古文書と現代地図の情報の対比に格闘させられた伊能忠敬ゆかりの地の探しとなつた。

今年も初詣は、苦労させられた忠敬さんに一層の愛着を抱いて深川八幡宮に参拝した。

（まちの さだお・日本土地家屋調査士会連合会副会長）

\*編集部注  
筆者の待野氏は銅像建立報告書・保存版にて「忠敬隠

宅と地図御用所跡考証」を著されました。



地図御用所跡  
中央区日本橋茅場町16



司天台跡の碑  
台東区浅草橋3丁目

## 十一屋

五郎兵衛も

ここに

梅の花

羽間生

芳名録

より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

芳名録を初めて手にした時から、特に気になつてゐる署名が幾つかあるが、これもその一つだった。

間重富ゆかりの方ではないかと、是非ご子孫と連絡をとりたいものと思つてゐたが、やつと実現してこのご署名の主、羽間平三郎氏のお孫さん平人さんにお目にかかり、いろいろとご教示頂くことができた。嬉しさこの上なしという次第である。

羽間平三郎氏が佐原へお出でになつたのは、前後の方の署名が「昭和十八年三月四日」と「四月二十一日」とあるので、十八年の春に違ひない。

この平三郎氏が間重富の顕彰に力を尽くし、羽間文庫を設立された方となれば、戦中にもかかわらず大阪から佐原までお出でになつた心意気も頷ける。その頃祖母・孝のもとに疎開していた洋も、或いはお目にかかるつていたかも知れない。

芳名録にご署名下さつた方のお顔を拝見するのは、初めてである。お借りした資料の中から、平三郎ご夫妻を紹介させていただく。

平三郎氏は明治二八年生まれ、戦前には方面委員、大阪市会議員、戦後は大阪府貸家組合連合会理事、会長をつとめられたこともあつた



羽間平三郎氏夫妻

が、代々の地主で、毎日五合の酒をたのしみながら、もっぱら祖先に関する資料の収集に励んだという。家計はすべてカエ夫人にまかせきりだったそうで、またこの夫人が大した女傑だったらしい。ご夫婦ともすでに物故されており、写真を見せていただくと、風容もまことに対照的だ。平三郎氏は一徹者らしく瘦躯の背をピンと立て、八字ひげをはやしているのに、夫人は体格大きく表情もゆったりして大地のおもむきである。写真を見ながら長男の平安氏夫妻や長女の浜本正女さんの話を聞くと、似た者夫婦のまる反対で、税金も家計もすべて夫人が一手に切り回し、また町の人はもちろん乞食にまで慕われるような母性の持ち主だったらしい。（足立巻一氏「羽間文庫のこと」より）

「重富は質屋で資産があつたと諸人は言うけれども、隣家よりの類焼で一庫を残すのみとなり、家の再建と商売の再建奔走のなかでの学問であったのを知つて欲しい」と平三郎は常に言つた。資産の乏しい中を血の滲む思いで文庫充実に力を注ぐ自分を重ねた言葉であろう。（「大阪春秋第八〇号」に寄せられた浜本正女さんの文より）

羽間文庫の充実に一生を捧げられた平三郎氏について、さまざまなエピソードを関西大学博物館彙報「阡陵」で羽間平安理事長が語られているが、その内容、語り口をお伝えできないのが、とても残念である。特に、羽間文庫の超宝物「兼葭堂日記」への情熱には、ただ脱帽してしまつた。秋の研究会旅行の折に、改めてその業績を偲ぶ機会を持ちたいものと思っている。

※もともとの羽間（はざま）姓を、重富の時に間（はざま）としたそ  
うである。

（伊能陽子）

※木村兼葭堂—きむら けんかどう—（一七三六～一八〇一）

江戸後期の本草家。名は孔恭、字は世肅。別号、巽斎（そんさい）。

大阪北堀江に酒造業を営む。小野蘭山に本草学、池大雅に絵を学ぶ。

奇書・珍籍・書画骨董を蒐集。日記を残す。

（広辞苑）

松浦静山や増山雪斎といった風流な藩侯とも親しく、北堀の自宅には大田南畠や谷文晁、田能村竹田といった文人墨客、そして大槻玄沢や司馬江漢、長崎出島のカピタンまでもがやつて来た。また地図コレクターでもあった彼は、『大日本細見指掌全図』（文化五年刊）を校訂している。

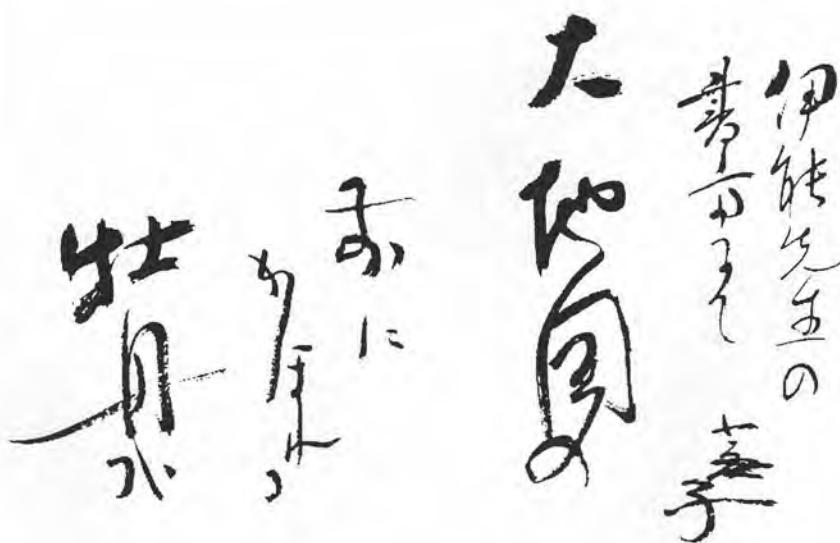
（芸術新潮四月号より）

### 芳名録解説のお願い

前号の「こぼれ話」にて伊能陽子さんよりお話のありました「芳名録」の解説をご教示お願いいたします。何か思い出などあれば編集部宛お寄せ下さい。

今回は以下のA・B・Cの三点です。

（編集部）



芳名録 B

神志氣也  
昭和三章  
夏八月  
永興達也

芳名録 C

不矢水永  
大正庚申四月三日  
仲伴忠先生之文及識  
國且朝光訓教不忘  
文意  
佐藤忠義

\*訂正とお詫び

前号の吉川英治氏の解説で一行目が『即 菩薩』となつております  
ましたが、正しくは『即 菩提』

月夜かな』 英治  
即煩惱乃  
です。お詫びして訂正します。

(編集部)

## 写真で訪ねる忠敬先生の足跡

### ホームページ伊能図書館に「史跡めぐり」を開設

前田幸子

#### 「ゆかりの地」と「全国測量ルート」

伊能忠敬に関する図書や文献資料を集めたバーチャル図書館「伊能図書館」は、一昨年十一月の開館以来、この一年半で二万三千人を超える入館者を数えました。「図書閲覧室」で単行本を、「文献資料室」で雑誌や文献資料を紹介するほか、「休憩室」に「伊能忠敬史跡めぐり」を設けて忠敬ゆかりの地の写真を展示していましたが、このたび「写真資料室」として改装オーブンしました。忠敬の生涯をたどる史跡のほか、一〇次に及ぶ全国測量の記念碑などを紹介しています。今後、各地にある伊能測量の史跡を順次紹介し、関連情報も充実させてゆく予定です。

#### 「測量之碑」と「星座石」

忠敬の史跡は佐原の忠敬旧宅など著名なものもありますが、あまり一般には知られていないものもあります。岩手県釜石市唐丹の丘に残る「陸奥州氣仙郡唐丹村測量之碑」は同時代の学者が忠敬の学識と偉業に感銘し、忠敬存命中に建てた石碑です。江戸時代に建てられた伊能忠敬の顯彰碑として唯一のものであり、その傍らに残る星座石と「地図の微動あらざらんか」という謎の言葉とともに、当時の科学者の真理探求の情熱を伝える貴重な史跡です。このような知られざる史跡を忠敬ファンを始め多くの人々に知つてもらうことも「史跡めぐり」の

目的のひとつです。

#### 「浅草司天台」と富士山

一方、その名はよく知られているものの、一体どんな施設だったのか想像がつきにくいのが「浅草司天台」です。現在残っている絵図を見ると、それは大きな物干し台のようなもの。葛飾北斎が描いた富士百景「鳥越の不二」には物干し台に設置された渾天儀の向こうに富士山が描かれています。当時としては奇観というべき風景だったのでしょうか。現在の町並みには当時をしのぶよすがもありませんが、「史跡めぐり」の絵図から当時の天文台の様子を想像して下さい。

#### 「偉人」「偉業」の実像を探る

伊能忠敬は、戦前は国定教科書に登場し、戦後も社会科の教科書に登場するため「偉人」として作り上げられたイメージが強く、その実像はあまり知られていません。また十七年間にわたる全国測量は「非常に大業、不朽の偉勲」とされ、常人の及ばざるものとして「偉業」の一言で尽くされがちでした。しかし伊能忠敬は超人でもなければ天才でもなかつたと思ひます。その生きた軌跡、歩いた足跡をたどることで「人間伊能忠敬」に親しみをもち、理解する手助けになればと思つています。

「伊能図書館」は伊能忠敬に関する情報の集積所としてますます充実を図つてきます。どうぞ期待下さい。

なお、この図書館への入館は伊能忠敬研究会のホームページからお入り下さい。

(伊能忠敬図書館・館長兼司書)

## 写真資料室

### 伊能忠敬史跡めぐり

#### 「伊能忠敬出生の地」(千葉県山武郡九十九里町小関854番地)

伊能忠敬は1745年(延享2年)1月11日(旧暦)、上総国山辺郡小関村小関新田で小関貞恒・みねの三人兄弟の末っ子として生まれた。幼名小関三治郎。満6歳の時に母みねが死去、入婿だった父貞恒は長男と長女を連れて実家神保家(現横芝町)に戻る。次男三治郎は満10歳の時に父の元に引き取られるまでここ九十九里の網元で名主でもあった小関家で育つ。その場所は現在伊能忠敬記念公園となっており、公園には象限儀とともに天を指し示す伊能忠敬の銅像が立っている。



伊能忠敬銅像



伊能忠敬先生出生之地碑

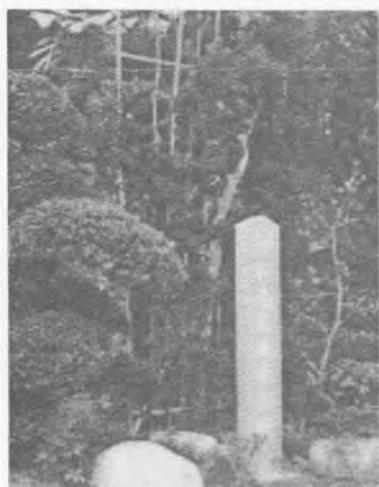
伊能忠敬



生誕250年記念切手

#### 「伊能忠敬成長の地」(千葉県山武郡横芝町小堤72番地)

忠敬(幼名 三治郎)は1755年(宝曆5年)10歳のとき、小堤村に戻った父・神保貞恒のもとに引き取られる。神保家は戦国時代から続く旧家で名主を勤める名家であった。神保家に幕府の役人が泊まったとき、計算に興味を示す三治郎にやり方を教えたところ、たちどころに覚えてしまったので役人が驚いたという逸話が伝わっている。以後、17歳で佐原の伊能家の婿養子になるまで父・貞恒、兄・貞詮、姉・房と四人で暮らした。父・貞恒はその後新しい妻を迎えると、神保家のすぐ近くの丘陵の麓(横芝町小堤44番地)に分家して村塾を開き、生涯そこで暮らした。



<http://www.tt.rim.or.jp/~koko/salon.html>

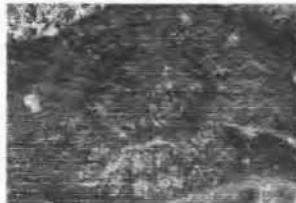


## 「陸奥州氣仙郡唐丹村測量之碑」と「星座石」 岩手県釜石市唐丹町大曾根237-1

三陸海岸の小高い丘に残る「陸奥州氣仙郡唐丹村測量之碑」は江戸時代に建てられた伊能忠敬の顕彰碑として唯一のものである。伊能測量隊は享和元年(1801)9月24日南部藩との境界にあたる伊達藩唐丹村で実地測量をした。地元の学者葛西昌丕(まさひろ)当時49歳は忠敬の学識と偉業に感銘をうけ、13年後の文化11年に「測量之碑」を建てた。忠敬69歳で存命中のことであった。碑にはこの地の緯度(39度12分)や唐丹測量を記念する文言が記されているほか、「地球の微動あらざらんか」という謹めいた言葉が刻まれている。これは西洋の天文学から「地球の微動」を知った昌丕がその解明を後世の人に託したものではないかと考えられている。また傍には「星座石」と呼ばれる40センチほどの平たい石がある。星座石は、中心に円が描かれ、円の中には「北極出地三十九度十二分」、円の周囲には十二宮と十二次が交互に配列されているが、この星座石の意味はまだ解明されていない。「地球の微動あらざらんか」の言葉とともに当時の科学者の真理探究の情熱を伝える貴重なものである。



「陸奥州氣仙郡唐丹村測量之碑」



星座石



案内標石「地球の  
微動あらざらんか」

## 「高輪大木戸跡」(東京都港区高輪2-19)

高輪大木戸は徳川幕府が宝永7年(1710)東海道の左右に石垣を築き木戸を設けたものである。この木戸は江戸の重要な入り口として規模も大きく、往来の客はここで旅装を改めまた江戸の送迎者もこの木戸までとされていた。伊能忠敬は東海道筋の測量に際してここを便宜上の基点とした。旧説明板には「また享和年間(1801年-1803年)伊能忠敬が全国を測量した際、ここを基点としたため測量史上貴重な遺跡となっている。」と記されていた。木戸は明治維新後廃止され、現在は片側だけ残されているがこの場所は第一京浜国道の交通量の最も多い地点であり、道路拡張のあおりで取り残されたようにわずかな石垣の名残が片隅に保存されているばかりである。



## 高橋景保「御用日記」より

安藤由紀子

## 景保の初仕事

文化二年二月二十五日、伊能隊は第五次測量に出発した。西国測量をこの一回で終わらせようとする壮大な計画であった。景保の弟善助（後の渋川景祐）を含めて三人の士分が加わった上下十四人の混成部隊で、幕府直轄の事業であった。手当を貰い支配機構を利用できるようになつた反面、二百年以上続いた幕府の官僚組織を動かさなければ、現地の測量も動かない仕組みとなつた。現地との間に多くの閑門を作り、何重もの間接性が権威を強化するシステムに伊能隊もまきこまれる羽目になつた。

幕府の権威と測量隊の間にたつて、一切の繁雑な事務が二十一歳の景保の肩にかかることになつた。隊の一行が何の懸念もなく測量に専念することができた裏には、総監督としての若年寄堀田撰津守や勘定所・奥御右筆等を相手に面倒な折衝にあつた、この若者の労苦があつたことを忘れてはならない。

ちょうど第五次の「高橋御用日記」が伊能忠敬記念館に所蔵されているので、これに従つて彼の労苦の跡をたどつてみたい。

先ず彼の初仕事は、勘定奉行や道中奉行に、各宿村々の問屋・年寄・名主・組頭に宛てた触書を出させることがあつた。また一行が出発した三日後、京都町奉行に次のような書簡を送つた。

## 市野金助と下河辺政五郎の交代

六月一日の「日記」には、忠敬が出発前に注文しておいた測器類が時計師弥五郎から届いたので、御用先紀州新宮まで届けねばならず、荷物の発送をめぐつて、寸法・重さなど勘定所との面倒な折衝の往復文書がいくつも残されている。

混成隊であったため、士分の下役と内弟子たちとの間に軋轢があつたらしいことは前に述べた。病気と称して下役の市野金助は帰府することになり、代わりに下河辺政五郎が江戸を立つた。この交代も書類

（前略）此度私手付伊能勘解由、ならびに私弟善助外下役二人、西国筋測量のため出張につき、御地通行いたします。右の件御地へ通達があつたことと存じます。

すなわち去る廿五日朝、内弟子も連れて上下十四人江戸を出発いたしました。通行筋は、東海道を桑名へ出、南海道に従い紀州浦を通り大坂へ出、五月頃御地へ到着と存じます。もつとも雨天その他で逗留の事もありますので、遅速のところは凶りかねます。御地到着の上：大津へ出、北海通行の積りにしております。詳しい事は、勘解由到着の上申上げます。測量と地図仕立てのため、宿泊所は狭くてもよろしいので、一行すべて同宿になるよう取り計らつてください。どうしても出来ない時は、近辺に別宿をご用意くださるようお願ひいたします。（後略）

上大変に手間のかかるものであった。一行はそれぞれに出発まえに手当等を先払いを受け取つてゐたので、金助は残りの金額を返済しなければならなかつたのに、治療費などに使つてしまつて即時に返債することができなかつた。これについても、勘定所・奥御右筆へ十年年賦で返納する交渉が必要であつた。

忠敬からは次のような増員の要求がきていた。  
「高橋御用日記」 閏八月

（前略）紀州一国すべて入海出崎多く、海岸絶壁大岩石、ことに波浪荒く、船による測量たいへん難しく、絶壁を伝いまたは岩石に取り付き、上下ともようやく測量のため、波浪をこうむり巖石より落ちて、怪我人もております。私はかねてより覚悟の上ですが、下役・内弟子の者まで難儀の上紀州は南へ張り出している國のため、特別の大暑で病人も絶えず、手分けの測量も差支えをきたしております。……大坂まで三ヶ月と見込んでおりましたが、六ヶ月もかかつてしましました。大坂・京都・江州測量中所々にて耳に入り、

月数八ヶ月、日数百九十九日勤務いたしましたので、受取の分より差し引き残り、……返納いたすべきところ、金助小身者の方、出發の支度及び病氣のため雜用多くかかり、残金十八両のみゆえ、今回これを返納いたし、あとは来年より十ヶ年賦にて返済いたしと、お願い申上げます。以上

丑 九月 高橋作左衛門

（前略）市野金助は、病氣に付き帰府いたしましたが、先日くださつたお手当等受け取りすぎに当たる分、日割りで返納するようおおせ渡されました。……

月数八ヶ月、日数百九十九日勤務いたしましたので、受取の分より差し引き残り、……返納いたすべきところ、金助小身者の方、出發の支度及び病氣のため雜用多くかかり、残金十八両のみゆえ、今回これを返納いたし、あとは来年より十ヶ年賦にて返済いたしと、お願い申上げます。以上

丑 九月 高橋作左衛門

（前略）この願いは、奥御右筆を経て、堀田摶津守へ提出され十一月に到り聞き届けられた。代わりの下河辺政五郎は、元来西丸書院番、山口和泉守配下の同心であつたので、先ず和泉守の承諾をえなければならずまた出發に当たつては、沿道通行の手配から旅費についての勘定所あいての交渉等、これまた何通もの往復書類が残つてゐる。

隊員の増派要求

（前略）この願いは、奥御右筆を経て、堀田摶津守へ提出され十一月に到り聞き届けられた。代わりの下河辺政五郎は、元来西丸書院番、山口和泉守配下の同心であつたので、先ず和泉守の承諾をえなければならずまた出發に当たつては、沿道通行の手配から旅費についての勘定所あいての交渉等、これまた何通もの往復書類が残つてゐる。

（前略）いざ人選にかかるみると、測量技術を身に付けているものは、そく簡単にはみつからない。また忠敬の心にかなわぬものでは、かえつて心労の種にもなりかねない。景保は忠敬自身や他の隊員との協調和合にたいへん気を使って人選を考えた。東嶋平橋という鍋島藩の家来

## 伊能忠敬全国測量の経路図

第五次測量(紀伊半島・瀬戸内海の島々・中国沿岸)



が、かねがね測量に加わりたいと願つており、象限儀も持つていると  
いうので忠敬に打診してみたが、

伊能忠敬書簡 X十三 高橋景保宛 文化二年九月二十二日

大津博物館蔵

(前略)さて東嶋は、鐘を持つような格の方でしようか。あるいは  
鐘以下の格の方でしようか。もし鐘供侍や、ぞうり取りなど引きつ  
れてやつてくるとなると、無益な人数も多くなり止宿にも差支え、  
今まで難所のご丹誠をなさつた方々より手際不案内なのに上格に見  
えるようでは、一同仲良くというわけにはまいりません。大手分け  
さえしなければ、象限儀は一つあれば十分です(後略)

又たとえ増員ができたとして、大きく二つに隊員を分け、何十日も  
分かれて測量を行う「大手分け」をすれば仕事は捲るが、別働隊の隊  
長をどうするかが問題で、一番頼りになる坂部貞兵衛を推薦してみた  
たけれども、忠敬と長く分かれたのでは、弟子たちの統率に自信がな  
いと断つてきただ。

景保は、各方面と相談の結果、中国筋の測量を終えた段階でいった  
ん帰府して休養の上、改めて四国・九州の測量をする以外に手がない  
と考えるようになつた。間重富も桑原隆朝も、御右筆の秋山松之丞も  
同意見であった。御右筆は、「先日から色々考えてみたが、中国地方を  
残らず測量の後、一先ず帰府いたし、勘解由の気に入った者を見立て  
て再度出張の方がよろしく、内々堀田摂津守へ伺つてみよう」といつ  
てくれた。そこで景保は、以下のような伺書を書いた。

(前略) 右之通り二段に致し、今度は中国筋・隱岐限りにて帰府でござるとなれば、行く先に限りが見え、隊員何れも氣力が出て測量にも励みとなり、おのづから病人も稀になることでしょう。もつとも中國・隱岐のみになつても、寅年(文化三年)に終わらせるのは難しく、翌卯年にも残ることと存じます。……今度いつたん帰府いたさせたく御伺い申し上げます。

丑 十月

高橋作左衛門

この伺書は内々に御右筆に見せて同意を得、彼を通じて堀田撰津守に提出された。二十六日許可が下りて、急ぎ忠敬に知らされた。

また計画では山陰道を先に測量することになつていて、予定が大幅に遅れてしまいこれから冬にかかるので、山陽道から取り掛かるよう行程の変更があつた。景保はその旨、沿道の村々への先触の書換えをしなければならなかつた。結局はじめの見通しは、あらゆる点で甘かつたのである。

忠敬からの増員要求は、このあとも続いた。景保はこれまた各方面に交渉の上、気心も知れ経験もある内弟子、門倉隼太と尾形顯次郎の派遣を実現させた。

隊員の不行跡

一行は、岡山で越年した。翌文化三年五月頃から忠敬は大病となり、長く測量を休んだ。長期にわたる出張であつてみれば、隊員の素行上

も問題が起こりがちであり、とくに先も見え、忠敬の引きこもりが続いたため、人々に心の緩みが出て、不行跡が表面化した。そしてついにこのことは、若年寄堀田撰津守の耳に達した。

九月十三日、御目付より景保に登城命令が出され、翌十四日堀田撰津守から次のように言い渡された。

「高橋御用日記」

九月十四日

(前略) 伊能勘解由御用先の件、中国・山陽道辺までは、取り締まりよろしく勤めていた由であるが、長州あたりより追々取り締まり緩み、石州・伯州・雲州あたりに到つて、不行跡が伝えられてきている。

宿々において無用の人足を徴収し、あるいは酒宴などいたし、酌とり女など差し出させ、下々の者などは買い物の代をも払わず、また宿々で食事の品数の少ない時は、みだりにこれを屬り、その上食器等こわしたりすることもある由、あるいは一人で手分け測量、船を用いたりする節、船中へ酒肴を取り寄せたりいたし、取り締まり甚だよろしからざるよう伝え聞いている。最初は勘解由の耳に入らなかつたようだが、次第に増長し、いまでは勘解由もおおよそ承知の由、もはやいつたん帰府の時期も迫つてゐるが、勘解由はまだこれから四国・九州へも出張するべき大切な身分であるから、これらを放置して途中何か起こつては困るので、ちよつと、注意してやつた方がよい。(後略)

この「御内意」は、測量の重大性と忠敬の役割を考えた思いやりのあるものであった。景保はたいへん恐縮して、こうした事件は、下々

の者の仕業であり、忠敬が長州から大病で引きこもつていたために起きたものであること、下々の者は田舎者で御用を権威と履き違えていたこと、忠敬は本来の御家人ではなく、仕事に熱中するタイプで、回りに目が届きかねること等をあげて陳謝した。そして勘解由宛の諫めの手紙を御用飛脚で送達した。忠敬からは十月十五日付で、証明の返書があつた。

帰府の後忠敬は内弟子三人を罷免し、坂部貞兵衛とともに「進退伺い」を出し、「おかまいなし」となつて一件落着した。

景保はよほど懲りたと見えて、後の四国・九州の測量中隊員の不祥事が無いかどうか確かめ、注意を怠りないようとの私信を何度も送っている。

高橋景保書簡 伊能忠敬宛 文化九年三月十九日

参考文献

上原久 「高橋景保の研究」

「高橋御用日記」

保柳睦美 「伊能忠敬の科学的業績」

伊能忠敬 「江戸日記」

伊能忠敬書簡 X十一

高橋景保書簡集

講談社

伊能忠敬記念館

古今書院

学士院写本

大津市博物館

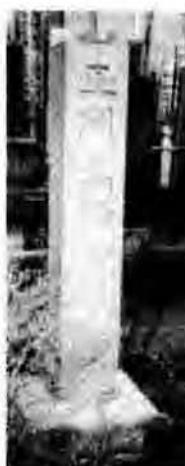
伊能忠敬記念館

情勢のもと、どうしても沿海を主とする日本全国を必要としていたことによる。蝦夷地測量にはじまる忠敬の技術の優秀さもさることながら、これに劣らず力のあったものとして、幕府の景保に対する絶大な信頼と、彼の裏方としての交渉と尽力、その外交的な手腕を見落としては、歴史の一面のみを見ることになつてしまふ。

すでに見てきたように、若年寄堀田摂津守の景保に対する信頼はこのほか厚かつた。堀田は寛政二年にその職に任じられて以来、四十年もその地位にあって、幕府の文教面で大きな功績をのこした。老中首座の松平信明ら当時の幕閣は、事実を探求することに大いに興味をいだいており、伊能図の成功は為政者のこうした合理的な態度にも支えられていたのである。

以上述べてきた景保の苦労は、氷山の一角であつて、気の遠くなるような雑務の連続であった。地図作成のために司天台の敷地の中へ地図御用所を新築する件なども上申したが、さすがにこれは認められなかつた。波乱に満ちた第五次測量はかくして終わつた。

幕府が大筋において景保の要求を入れたのは、緊迫化していた国際



## 伊能忠敬測地原図

渡辺 一郎

## 二、種類、数量等

故秋岡博士によれば、東京大学総合図書館蔵の測量下図は93枚（小図57枚、中図36枚）のことであるが、筆者の調査ではつぎのとおりであった。

小図 59枚 大形 概ね32cm×47cm 3枚

中図 34枚 小形 概ね23cm×33cm 56枚 三分一里

大形 概ね32cm×47cm 32枚

小形 概ね23cm×33cm 2枚 六分一里

大図 1枚 大形 概ね32cm×47cm 1枚

小形 概ね23cm×33cm 1枚

全体を「伊能忠敬測地原図」と題する38cm×53cmの桐箱に納められており、貴重書扱い（請求番号A00-4549）となつていて。閲覧は目的を述べて事前にハガキで申し込む必要がある。

## 三、特徴

同様な形式の下図は芝公園の三康図書館（旧大橋図書館の蔵書を引継いでいる）も所蔵するので、突合させたところ、東大の原図の欠番と三康図書館の原図番号と接続する部分があることがわかつた。東大の原図と三康図書館の原図は、もともと一体だったものが、何らかの理由で分散保管されているものと考えられる。

本図の下図部分の描図形式は一定であるが、その他の書き込みは次に示すようにまちまちである。

A・タイトルを裏に書くものと、表に書くもの、無いものがある。  
針穴からみて、本図は何回か使用されたように見受けられる。対象地域はばらばらで、ある特定の地域あるいは時点の測量結果ではないかる。

が、用紙のサイズは大小の二種類にほぼ統一されている。

整理番号	図名または掲載範囲									
	区分	小図	大図	中図	中図	中図	中図	中図	中図	中図
1	自	身延山山門		至	福士村					
2	自	辻堂村東海道追分		至	大山歴て田原村制札					
3	自	熊谷より川越経て		至	入間郡大仙波新田					
4	自	深川測処		至	千葉大堀村					
5	自	信州洗馬宿		至	川中島塩崎					
6	自	飛州無數河村		至	高山至信州藪原宿					
7	自	（野麦峠越え）		至	西国街道①					
8	自	信州佐久郡借宿村		至	淀より神戸					
自周防國吉敷郡	下仁田通り	（途中、多古碑に寄る）		至	西国街道⑥					
至	東佐波、地福村	（途中、多古碑に寄る）		至	本郷村一上瀬野村					
中図	大	中図	中図	中図	中図	中図	中図	中図	中図	中図
大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大

四、原図94枚のリスト

原図94枚のリストは以下のとおりである。整理番号は東大の整理番号である。番号は93番までであるが、26番が重複しているので、94枚となる。図名はあるもの、ないものがあるので、代表的な地名等を付したものもある。

各図ごとに小型の東大蔵書印がある。

C・図の範囲を、詳細に△△界から□□界と表示するものがある。  
 D・下図に枠を描くものと、ないものがある。  
 E・作業日を記入するものと、しないものがある。  
 F・朱を使ったものと、使わないものがある。  
 G・作業者の名前の入ったものがある。  
 などで、特定の小数の者の手によるものではなく、多数の人々の合作と思われる。

9	自	山口道場門前町		至	宮野村、龜尾川峠		中図
10	自	豊浦郡小月		至	萩		大
11	自	出沢・大海郡界		至	岡崎諏伊街道2		大
12	自	中山道歴名古屋		至	額田・賀茂郡界		大
13	自	根羽宿（信州）		至	飯島宿（岡崎）		大
14	自	葛西川より龜戸村		至	入船町		大
15	自	甲信界		至	身延山		大
16	中山道	6		至	和戸川田村		大
17	中山道	5					大
18	中山道	6					大
19	西国街道⑤						大
20	備後國川北村一安芸國豊田郡本郷村						大
21	西国街道④						大
22	岡山・神辺附近						大
23	西国街道①						大
24	淀より神戸						大
25	西国街道③						大
26	自	西国街道③					大
27	自	自					大
A	矢吹						大
5	番						大
26	至						大
26	至						大
25	至						大
24	至						大
23	至						大
22	至						大
21	至						大
20	至						大
19	至						大
18	至						大
17	至						大
16	至						大
15	至						大
14	至						大
13	至						大
12	至						大
11	至						大
10	至						大
9	至						大
8	至						大
7	至						大
6	至						大
5	至						大
4	至						大
3	至						大
2	至						大
1	至						大
（筆者注）	西国街道の下図で、欠番となっている②⑦⑧⑨は東京芝の三康図書						
館所蔵							

49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	
中国第17番	中国第16番	中国第15番	中国第14番	中国第13番	中国第12番	中国第11番	中国第10番	中国第9番	中国第8番	中国第7番	中国第5番	中国第6番	中国第7番	中国第15番	九州第17番	九州第14番	九州第12番	九州第8番	九州第7番	自日向	自日向	
広島	大根島	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	仁方村(安芸)	銀山町付近	益田、渡津	周防	朱杵あり。記人細かい。	人吉の付近	串木野一薩肥界	串木野付近	鹿児島付近	日向・大隅界付近	日向赤江川	自日向	本庄村	自日向	本庄村	
平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	大崎下島	大崎下島	川北村、下河井村	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	平野縮図	至美々津富村	至椎葉神門村	
(筆者注 島の名称である)																					至日向	本庄村

右下に平野縮図と作業者名がある。

小図	中図																				
小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大	大

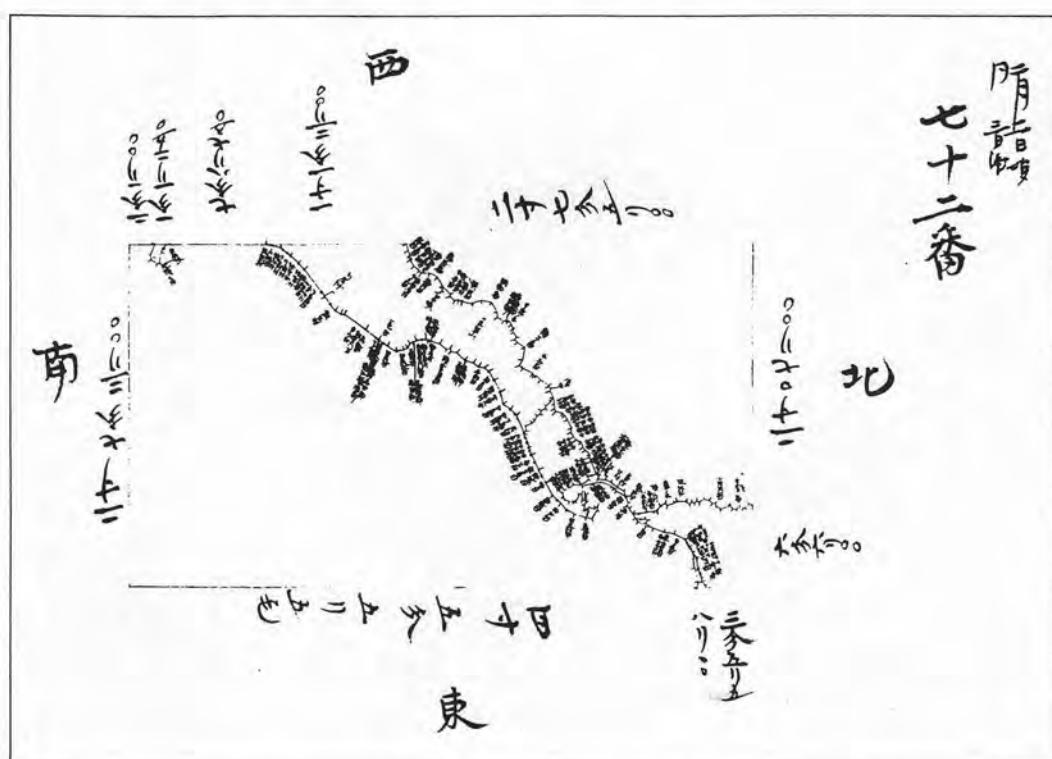
70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	
(筆者注 第89番)	第88番	第87番	第75番下	第75番上	(筆者注 第72番)	(2月2日始め、3日済み)	蒲原、三保、藤枝付近	新島、神津島	青ヶ島の位置	小県郡、諏訪郡界	水内郡、更科郡界	菅平山	諏方郡	郡上郡	第66番	第65番	第59番	第58番属	第55番	第52番	中国第29番
第85番	第84番	第83番	第82番	第81番	第80番	第79番	第78番	第77番	第76番	第75番	第74番	第73番	第72番	第71番	第70番	第69番	第68番	第67番	第66番	中国第28番	中国第27番
91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112
(筆者注 各図は三康図書館蔵)																					

小図																					
小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小

93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71
第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第	第
127	126	125	124	123	123	122	121	120	116	114	113	112	111	107	106	105	104	103	102	101	100	98
番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番	番
三本木	九戸、閉伊郡	沼宮内宿	秋田郡、山本郡	太平山の位置	花館	花巻	津軽町	最上郡	牡鹿	松島	藏王山	白川、那須	宇多郡、行方郡	安達郡、伊達郡	伊達郡、刈田郡	飯豊山	磐梯山	刈羽蒲原	刈羽	飯豊山	磐梯山	刈羽蒲原
属																						

(筆者注  
115  
117  
の各図は三康図書館所蔵)

小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小	小
図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図	図



# 伊能図における経線のズレについて（1）

吉田正人

## 一、はじめに

千葉県佐原市にある伊能忠敬記念館に入館すると、最初に出てくるのが衛星写真による現代の地図と伊能図を重ね合わせ、「伊能図のズレ」を説明した展示である。展示作成者の意図としては、おそらく伊能図が現代の地図と比べても遜色のないものであることを示そうとしたのであろうが、これを説明するボランティアの方々は、最初から「伊能図のズレ」という難しい問題にぶつかり、これを如何に説明したらよいやら頭を悩ませていると聞いた。

「伊能図のズレ」の問題を最初に指摘したのは、大谷亮吉（一九一七）であり、その後、保柳・廣瀬（一九七四）が大谷の厳しい批評に反論している。展示に使われている図（図1）は、この際に保柳が使用したものだが、その後は保柳の意図に反して一人歩きし、むしろ「伊能図のズレ」を強調するために使われてきた。

また一九九八年に里帰りし江戸東京博物館に展示された英國海軍水路部の伊能図を仔細に検討すると、英國海軍は「日本朝鮮近傍沿海図（一八六三）」をメルカトル図法で編纂するにあたり、最初に伊能図の経線を忠実に写し取ろうとしたが、途中でズれているのは海岸線ではなく経線であることに気づき、海岸線をそのまま生かして経線を修正していることを発見した（写真1）。百年以上前の英国人が「伊能図の経線のズレ」の問題を解決しているのに、現代の日本人が伊能忠敬記念館の展示を見て「伊能図の海岸線がズれている」という誤解を持つたまま帰るのはたいへん残念だと感じ、「伊能図の経線のズレ」に

写真1 英国グリニッジ国立海事博物館にあった伊能図

伊能図の緯度線をもとにメルカトル図法に変換しようとした鉛筆の跡が残っている。しかし実際には伊能図の海岸線を生かしたメルカトル図が作成された。



関し、伊能図の研究の歴史を遡って検証するとともに、伊能忠敬はこれをどう解決しようとしていたかを推測し、伊能が作りたかった日本地図を再現してみたいと考えた。

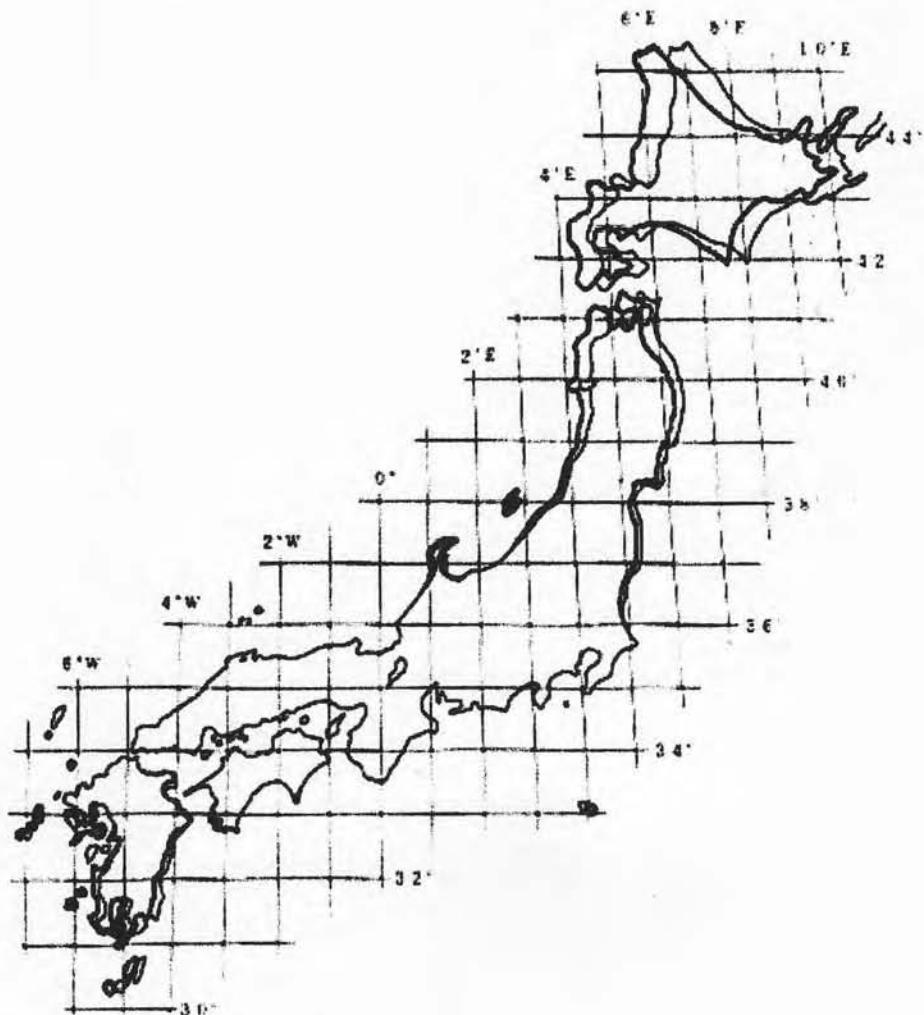


図1 保柳が「伊能図のズレ」を説明するために示した図

(「伊能図に学ぶ」東京地学協会 1998 より引用)

伊能図の海岸線（細線）は、現代図の海岸線（太線）に比べ、  
東北、九州で東にズレているという説明に使われてきた。

## 二、経線のズレに関するこれまでの研究

### (1) 大谷亮吉による批判

大谷亮吉は「伊能忠敬（一九一七）」の中で「文政四年に大成せる輿地全図には描画上非常なる過失ありて東北及西南地方の経度に大誤謬あるにも係らず当事者の注意を喚起するに至らずして漫然観過せらるたるは畢竟かかる大誤謬を直接に指摘するに足るべき有効なる天体的経度算定の結果の存せざりしことを告ぐるものにして又以て経度測定の失敗に終わりたる一証となすべし」と、文政四年に完成した大日本沿海輿地地図における東北・九州の東西方向のズレを指摘し、「大失態・大混乱」と言葉を極めて批判している。

大谷はその原因の第一を、経度測定の失敗に帰している。具体的には、伊能測量隊の測量期間に起つた日食四回、月食九回のうち「信すべき経差を算定し得たるは多くも一、二回を越えず。更に測地誤差補正用として其効力を發揮せしものに至りては遂に全くこれあらざりしに似たり」。また木星の衛星食の観測一五回のうち「江戸歴局にて同時観測を施行し得たるもの……多くも五、六カ所以上に出でざるに至るべし。……忠敬が非常なる努力の結果として木星衛星の観測材料より算出したる経度は遂に地図の総括に資せんとする当初の目的を毫も満足する能はずして全く無効の労役に終わりたること殆ど疑いを容れず」と厳しい評価をしている。

大谷はその第二の原因を、地方図を総合して総合図を作成する際の接合方法に帰している。文政四年の大日本沿海輿地図は、近畿中國図を中心にして、東に東日本図、伊豆諸島図、蝦夷図を、西に四国図、九州図を接合したものである。しかし、京都を中度とする近畿地方図に対して、江戸を中度とする文化元年の東日本図を接合するにあたり、

新たな経線に基づいて海岸線を改描する必要があるにもかかわらず、「何等の変更を加ふる所無くもとの併にてこれを輿地全図上に転写せり。総合の方法斯の如く粗雑と云わんよりは寧ろ亂暴を極めたるが故に……若狭国境より東北に進むに従い誤差の値は漸次増大し能登、越後辺の海辺に於ては既に四、五分乃至六、七分に及び東海岸及び奥羽地方に在りては誤差は緯度の閑数として北に進むに従い増加し、三厩、野辺地に於いては其値實に二十分内外に達したり」として、「姑息なる方法」という表現を用いて厳しく批判している。

さらに大谷は第三の原因として、地図投影法の知識の不十分さを挙げている。「忠敬はこの図（東日本沿海地図）を製するに当りてもサンソン（以下サンソンはママ）・フランムステッド式によりて経緯線を描画し江戸黒江町を通過せる経線を以て初子午線となし緯線に直交せる直線を以てこれを表示せり……一方に於てはサンソン・フランムステッド式によりて経緯線を画せるにも係らず他方に於てはこれと両立せざる相似関係を成るべく図上に保有せしめんと欲したる為め描画上混乱を來したるものなり、忠敬の没後文政四年に完成せる本図（大日本沿海輿地図）は……サンソン・フランムステッド式により京都西三條台改曆所跡を通過せる経線を以て初子午線となしこれを緯線に直交せしめたるを以て図幅の東西両辺の付近に於ては経線は緯線に対し傾斜すること甚しく極端なる場合には九十度より違うこと實に七度許に達したり」と述べている。

大谷はさらに享和三年に高橋至時が間重富に与えた書簡を引用し、「高橋至時は忠敬が測量業務を開始せる後幾ならずして早くもこの欠点に留意する所あり、経緯線描法即ち地図投影法の改良に意を潜め遂に一案を得て更に大に研鑽を加え以て忠敬が測量の一脱落を告ぐるを待ち新方式により地上に於ける実際の形勢に最も適応せる地図を作製

せしめんと企てたり」と高橋至時が円錐図法に似た新投影法を企画しながら文化元年至時の病没のため、同年八月に上梓した東日本図がサンソン・フラムステード式を採用したことの忠敬の責任に帰している。一方で忠敬自身もこれに満足せず、更に適切なる投影法を求めて文化二年以後に、「一里六分図東西之經度並自北極下國直円經差」と題する計算表を著し実用準備にかかるにもかかわらず、忠敬の死後、文政四年に完成した大日本沿海輿地図において旧法を適用し誤謬を生じせしめた責任を至時の子の高橋景保に帰している。

第四章「測量の精度」の第六項「地図の精度」では、二十数頁にわたって地方図と総合図の諸地点の經度を、最近測定の經度と比較しその差を示している。この際、本州東半分については江戸を基準とする子午線をもとに、また九州については小倉を基準とする子午線をもとに、諸地点の經度を割り出せば、最近測定の經度との差が小さくなることを示し、「茲に試みたる經線改描の如きは忠敬が総合図を製するに当たり犯したる大過誤に対する概括的訂正たるに過ぎず、更に描画方法の厳密ならざりしが為めに誘入せる描画誤差を局部毎に逐一明にするを得てこれに対する補訂を施さば一層各地点經度の誤差を縮小し得べきや疑いを容れず」と自信のほどを示している。

## (2) 保柳睦美による反論

保柳睦美は、伊能忠敬没後一五〇年を記念して刊行された「伊能忠敬の科学的業績（一九七四）」の中で、「大谷氏がなぜこのようにはげしく非難するのか、私はどうも解せない。むしろ根本は、大谷氏自身が、忠敬当時の日本の学者の地図（特に經緯線の描き方）に関する科学的知識の水準を独断で決めてかかり、実は全く理解していなかつたことによる。……極端にいえば經線は全国的には記入する必要がな

かつたくらいのものである」と大谷に反論している。「伊能忠敬」については、「彼が四二歳の時の著作であるから、その若さと、彼の専門の立場から、經度の狂いは許せなかつたのであろう」とある程度の理解を示しているが、外国人に紹介するため、英文で著した「Tadataka Ino(1932)」については、「一片の伊能図も示すことなく、しかもその精度において、經度の狂いを依然として強調していることは、全く了解に苦しむ……地図作製当時の要求や、当時の地図編集に対する日本の科学界の知識の程度を十分に考慮せずに、地図に対する現代の精度の要求を基盤として臨む点において、大谷氏の態度にこそ大失態を認めないわけには行かない」と酷評している。

保柳氏の反論の第一は、サンソン・フラムステード図法を採用したというには誤りであり、經線はあとから計算によつて記入されたものであるということである。すなわち「忠敬の測量材料、緯度一度の距離と主要地点の緯度および測線に沿う地点間の方位と距離は測定ずみ、しかし經度は不明くと、忠敬の考え方による經緯線記入方法として最も自然に落ち着くものはこの種のものになつてくる」のである。

保柳は經度の誤差の諸原因として、第一に日本の諸地点の正しい經度がわかつていなかつたことを挙げ、この証左として、仮に伊能図の經線が正しいと仮定して、現代の同縮尺の日本地図を重ねてみると、伊能図は北海道から東北地方、および九州地方では東にズレるが、北緯三五度周辺ではほとんどズレが見られないことから、「この地帯では伊能図の經度もかなり正確なものであつて、決して『無意味なもの』ではない。」東海道・山陽道・北九州へかけての主要都市の經度決定は、当時の曆学上からも望まれていたものであること・伊能図は、だいいその要求を満たしているものであることを示す」と評価している。

誤差の第二の原因として、当時の磁針の偏角の分布が、現在と違つていてことを検討している。これは地質学者のナウマンが一八八七年に発表した興味深い説であり、「忠敬の測量時代には、江戸付近を中央にして、偏角がほとんど〇度に近かつた。しかし忠敬の時代に南北十五度にわたる地帯が、どこも偏角〇度であったとは考えられない」。当時は日本列島をやや東西に横断して〇度の地帯があり、その北部は西偏、南部は東偏の傾向があつたのではないか」というものである。ただ「偏角だけを原因とすれば、こんなにひどい海岸線のズレがおこるためには、たとえば東北地方で、すでに一〇度近くも西偏していたことになる。これは全く考えられことであるから、他にも原因がなければならない」と説明している。

第三の原因として、保柳自身の実験、すなわち、「大胆にも試みに北緯三五度において、各経度ごとに垂線を描いてみる。その結果・・・東北地方から北海道へかけては、文化元年上程図の経線に似たものになる」という実験に基づいて誤差の原因を推測している(図2)。そして、「大日本沿海実測全図の編集に際して、京都西三条台改暦所跡を〇度(中度)の経線としながら、東日本については文化元年の陸地配置の図をそのまま使用した。しかもこの図は、江戸を通る経線を〇度としたものであるから、京都を通る経線を〇度として正しく描き直した図に比べると、東北地方から北海道へかけては、もともとその位置が東へ寄つてゐるものなのである」、「伊能図の大日本沿海実測全図における陸地配置の編集には、各地方図がそのままに東西に繼げられるというような、現代の知識からみれば理論に合わない部分があつたことは否定できない。・・・このようないく図を基盤として、この上へ、京都を通る経線を中度とした諸経線を、独自の計算によって記入してし

まつたから、その北東部や南西部では誤差が大きく現われ、ことに北海道ではこれが最もひどくなつたものであろう。そしてこれが伊能図における経度のズレに、最も大きな影響を与えた原因と思われる所以ある」と結論している。

なお保柳が、第一の原因を説明するために示した図(図1)は、北緯三五度付近ではズレがないことを説明しようとした保柳の意図とは異なり、その後、伊能図のズレを説明するために繰り返して引用されるようになる。佐原の伊能忠敬記念館の展示もこれをもとにしている。この妥当性については、後に再検討することとしたい。

### (3) 廣瀬秀雄による反論

廣瀬秀雄は、「伊能忠敬の科学的業績(一九七四)」中で、忠敬は江戸に出たときにすでに全国測量の計画を持つっていたという持論を展開した後で、大谷の伊能図の精度に関する主張に言及している。

まず廣瀬は、「従来の伊能図の研究者は伊能図に經緯度線があるといふ事実によつて、投影という言葉を日々と使用しているが、それについては一考が必要である」として、「大谷氏はその議論の過程で、伊能図が、経度については理論的な投影思想による議論ができるいな要素を含むものであることを指摘しながら、最後まで経線に執着され、場合によつては経線の改描ということまで実行して、伊能図をあくまで経緯線でとらえるという態度をとつておられる。・・・地図の精度はあくまで地図自身に語らせる方法をとるべきで、任意性をふくめる恐れのある経緯線改描というような方法は一考を要する。・・・と大谷の分析を批判している。

廣瀬は忠敬の測量及び経緯線記入の手順を細かに説明した後で、「忠敬が描いた経緯線ネットは、東洋流の北極出地と方格図という思

修正東5度 修正東10度

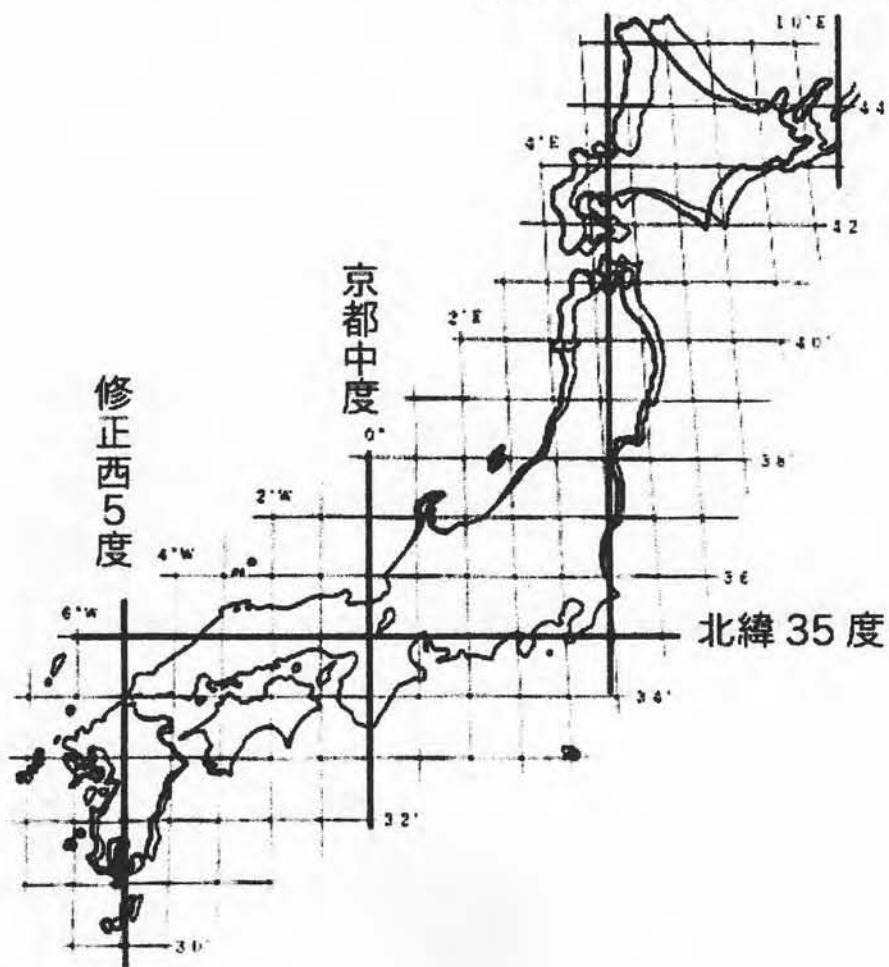


図2 東日本の地図が正確であることを示す保柳による実験的な試み

北緯35度線に垂直な経線を引いてみると東5度線は渡島半島、東10度線は根室半島を横切り、文化元年東日本図と一致し、現代図とも矛盾しない。

想図に、無理に西洋流の経線を書き込もうとすると、必然的に生じるネットであり、投影の概念がまだ成立していない以上、このネット描法の源流を、投影にもとづく西洋流のものに求める必要はなく、自然発生的に描かれたものとわたしは考えるものである」と述べ、これを理解せずに伊能図の経線のズレを強調する大谷を、「伊能図に勝手な経線を記入し、その経緯線に従つて読みとつた任意地点の経度値といふものを近測経度値と比較することは経線記入の誤差を論じることにはなつても、伊能図の経度方向の持つ意義、または地図の持つ対測量起点経度差の精度を論じることにはならないであろう。

いわんや中央子午線を任意に設定し、経線を改描した結果について、経度の読みとり値と近測地とを比較しても、それは改描経線によるもので、経度の読みとり値と近測地との差はこれほどになるというに留まつて、地図の精度とは程遠い議論のように思われる」と反論している。

さらに廣瀬は、伊能図の原資料ともいえる「文化五年四国及大和地測量、文化七年九州之一部東西南北距離記」、「諸国測量地図北極高度并東西度」をもとに、四国および九州の各地点の経度を忠敬がどのように算出していったかを求め、現代の国土地理院発行の二十万分の一地勢図との差を検定し、「これららの現象は、いずれも、伊能図は單に東西分・南北分によつて描かれ、寄せ集められたということを証拠立ててゐるのである。従つて経緯線の記入されている地図は投影にもとづいて描かれているはずとの信念により、SF (サンソン・ラムスチード) ネットによる見かけの経度値にもとづいて伊能図の研究方法は全く過つたものであると考えられる」と論じている。

#### (4) 羽田野正隆による評価

羽田野正隆は、「伊能図に学ぶ（一九九八）」の第九章「伊能図の評

価と今後の課題」の第二項「なぜサンソン・ラムスチード図法が使われたか」において、大谷と廣瀬の両論を紹介している。

羽田野自身、東大総合研究博物館所蔵の伊能中図をもとに、北緯三〇～四五度の北緯一度毎に、経度一〇度の平均値を読み取るとともに、正弦曲線による期待値を示して、伊能図に「サンソン・ラムスチード図法が使われたことがわかる」としている。ただし羽田野は、大谷とは違い、地図の投影法として最初からサンソン・ラムスチード図法が用いられたと言つてはいるわけではない。

羽田野は、経線記入の経緯を、「それらの地図（平面図の集合体である日本地図）に経緯線網をかけること自体無理なのだが、緯線は平行線としてなら正しく記入することができる。実際、緯線のみの中図も残されているが、観るものに完成された地図の印象を与えない。そこで経線も描かざるをえなくなるのだが、忠敬はこれを次のように處理した。まず各緯線上に緯線間に相当する経度弧長を算出し、それらの値を京都を通る経線を中心（中度）として東西にプロットし、最後に対応する点を結んで経線とした。このような網目はサンソン・ラムスチード図法と呼ばれているが、同図法を採用したことにより、中央経線から離れるにつれ、実際の経度とのずれがめだつことになつた」と説明している。つまり、地図は平面図の集合体であり、経線はサンソン・ラムスチード図法によるものという、保柳・廣瀬の説に近い。

一方では、「廣瀬氏の所論は測量の方法が図法の性格を規定したとみるのであり、おおむね筆者の上記説明に近い。しかし大谷氏の考察が間違つてゐるかというと、一概にそうともいはれない面もある。というのは、図法は球面を平面に展開するための手段であり、むろん誤差の少ないものを選ぶ方が望ましいわけである。その観点に立つと、

大谷説になるし、別に地図内容と経線が一致していなくとも構わないという観点に立てば、廣瀬説になるからである。」と大谷、廣瀬の違いを観点の違いとして説明し、「そもそも忠敬の測量では経度を測ることができなかつたし、彼の周囲には球面幾何学を自在に扱える職能集団もいなかつた。そのような技術環境のもとでは、投影法のみきりはなしで、その適否を論じてもあまり意味がない。伊能日本図における経線はいわば装飾ぐらいに考えておいた方がよいように思われる」と結んでいる。

### (5) これまでの論争をまとめると

伊能図の経線のズレに関するこれまでの論争をまとめると、伊能図（文政四年図）に描かれている経線が、現代図に描かれている経線とズレていることは誰もが認めている。

また、その原因の一つが、伊能らが天測により正確な緯度を測定したにもかかわらず、経度の測定には成功せず、経線のズレを修正するだけの科学的な根拠を持ち合わせていなかつたことも誰もが認めるところである。さらに、伊能図（文政四年図）が、平面図である地方図を東西に接合したものであり、地図投影法にもとづく修正を行つていいないために経線のズレが生じていることは、大谷・保柳・羽田野ともに認めている。

大きく意見が異なる点は、「伊能図がサンソン・フランムスチード図法を採用した」かどうかである。

大谷は「忠敬が其製作せる地図に採用せる経緯線の描画法は外国より伝来せる形式を模倣せしものなるや否や明ならず。又忠敬がこの形式を採用するに至りたる経路を明記せるものを見ず」とその根拠を示さず、「忠敬は爾後晩年に至るまで其製作せる地方図に対し終始一貫

してサンソン・フランムスチード式を採用せるも」とサンソン・フランムスチード図法の採用を前提として議論をすすめている。また、高橋至時に対しても「当時所謂正写影法は既に崇禎曆書等に記述せられ、又円錐投影法若しくはこれに類似せる方法によりて地球面の一部局を描出したるものも至時の見聞に達せざりしにあらざるべし」、その子の景保に対ても、「文化年間に著したる地図につきて見るも万国全図には正写影法を使用し日本辺界略図には円錐図法を採用するに謬らす。以て投影法に関する知識決して貧弱にあらざりしを察すに足るべし」と、当時から投影法の知識があつたはずだという前提のもとに議論をすすめている。

これに対して保柳・廣瀬は、「伊能図がサンソン・フランムスチード図法を採用したというのは誤りであり、経線はあとから計算によつて記入されたものである」と主張している。羽田野はサンソン・フランムスチードにもとづいた経線が引かれていることから、「サンソン・フランムスチード法を採用した」という表現を用いているが、経線はあとから記入されたことは認めている。

伊能図は、地上の測線の測量を導線法によつて正確に実施し、富士山等の目印を用いた遠方交会法、天測による緯度の測定によつてそれを修正したものである、経度は天測によつて測定することができず、測地点間の距離の東西分をその緯度の経度一度あたりの距離で除することで推定している。

経線はこの数値とはかかわりなく、地球を球面と仮定して各緯度における経度一度の距離を計算し、京都を中度として、この距離を隔てた経線を引く。すると緯線は平行の直線、経線は北極に向かつて収束する直線からなる経緯線ネットができる。この地図作成手順は、大谷・保柳・廣瀬・羽田野ともに認めているところである。

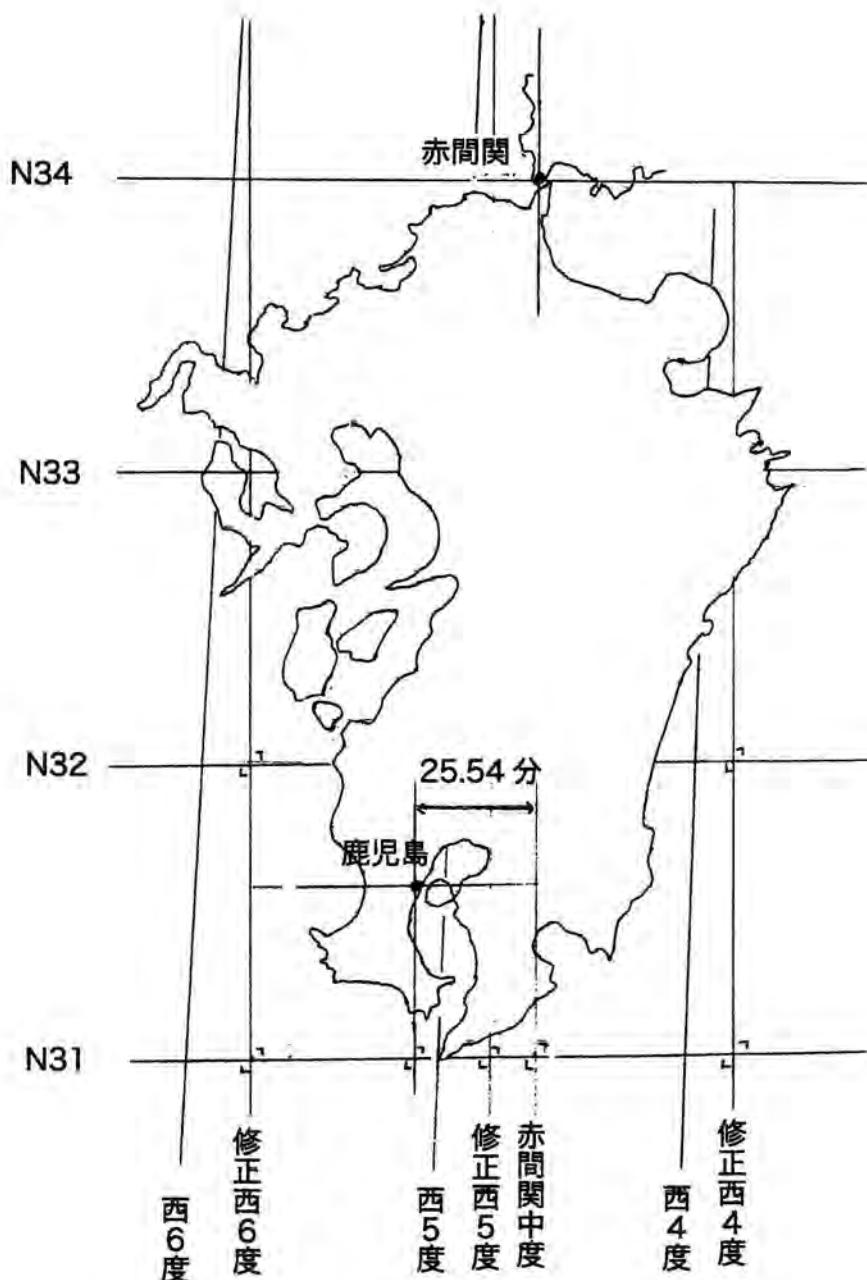


図3 九州の地図がほぼ正確であることを示す廣瀬・保柳の実験的試み

廣瀬（1974）は伊能測量の元データである「文化七年九州之一部東西南北距離記」を基に赤間関と鹿児島の経度差が 0 度 25.54 分であることを計算した。保柳（1974）が実験したように北緯 35 度線から垂直に修正経線を引き直し、それを基準に赤間関と鹿児島の経度差を求めると約 25 分（現代図によれば 22 分）となり、ほぼ廣瀬の計算通りであることがわかる。

このような経線を引くことによって、経線が斜行する地域では、地図上の方位盤の南北と経線の南北が異なるという事態になることや、東日本図（文化元年図）と日本全図（文政四年図）の経線の方位が異なるというような基本的な問題に、忠敬らが気づかなかつたはずはない。にもかかわらず、このような経線が引かれたのは、当時の科学技術では、地図投影法をもとに地図を作成する技術がなかつたからであると考えられる。忠敬の考えでは、あくまで地図の基本は、地上の測量及び緯度の天測にもとづいた海岸線であり、地図投影法によつて海岸線を変形するという考えはなかつたのであろう。

保柳は、「伊能図がサンソン・フランムスチード図法を採用したといふのは誤りであり、経線はあとから計算によつて記入されたものである」と断定しながら、彼が示した図は「伊能図の海岸線はズレている」という誤解のもとを残した。保柳の説をとるならば、伊能図と、メルカトル法による現代図を重ね合わせた図を提示すべきであった。そうすれば、ズレているのは海岸線ではなく経線のほうである、ということが分かつたはずである。保柳は大谷批判の最先鋒であるが、論文中でも「海岸線のズレ」と「経線のズレ」を混用するなど用語上の矛盾があつたり、誤解を招きやすい図が大谷の誤りを補強するために使われたことは、残念なことである。

保柳を補つてゐるのが、廣瀬の論文である。廣瀬は伊能図の原資料ともいえる「文化五年四国及大和地測量、文化七年九州之一部東西南北距離記」、「諸国測量地図北極高度并東西度」をもとに、四国および九州の各地点の経度を忠敬がどのように算出していたかを求め、現代の国土地理院発行の二十万分の一地勢図との差を検定している。

すなわち忠敬は、四国に於ては岡崎村（徳島県鳴門市）、九州に於ては赤間関（山口県下関市）を基準として、四国・九州の各地点と基

準点との、東西・南北の距離の差、経度の差を示してゐる。これによれば、赤間関・鹿児島間の経度差は、二五・五四分となり、大谷が伊能図（文政四年図）から読み取つた一八分とは違つてくる。（図3）

ちなみに現代の地図による下関と鹿児島の経度差は約二二一分であるから、「九州南部の測地点の経度は、現代の地図より東にズレている」という大谷の指摘とは反対に、伊能図の九州南部は現代の地図より西にズレることになる。

伊能図は地図投影法については全く考慮せずに作成された平面図の上に、地球が球面であるという知識（当時すでに地球の断面は橢円であることが知られていた）にもとづいた経線を引いたものであり、サンソン・フランムスチード図法を採用したとはいえない。

伊能図の経線が、地図投影法を承知した上で引かれたものでない以上、文政四年図上の各地の経度が、現代の地図上の各地の経度と比較してどれだけズレているかを論ずるのは意味のないことである。

もし伊能図と現代図を比較するならば、廣瀬のいうように「地図に語らせる」、すなわち伊能図から経線をとりのぞいた状態の図と現代図の比較、あるいは諸国測量地点の推定経度と現在の経度の比較を行うべきである。

次号は、以上のような視点で、伊能図と関連した地図を重ね合わせて比較し、どのようにしたら伊能図を現代の地図投影法を使って蘇らせることができるかを考えてみたい。

（つづく）

## 篠山領追入本陣の事前準備

—篠山市大山・園田家文書—

横川淳一郎

## はじめに

忠敬が篠山（ささやま）領にやつて来たのは、九州第一次測量の帰路で、文化八年（一八一）三月四日姫路を出立、三月八日篠山領今田の木津から釜屋へ測りに来た。

その後、九州第二次測量では、文化十一年（一八一四）の正月を姫路で迎え、但馬から丹波氷上郡を通り、大山（二月三日）から福住（二日）まで（途中二日間は摂津へ）を測った。

篠山領は現在の篠山市で兵庫県中央部の東端にあり、江戸時代は多紀郡の殆んどが篠山藩領であった。

当時の藩主は青山下野守忠裕（ただやす）。五万石の譜代大名で、忠敬が測量に来た時は老中職として江戸に詰めていた。

（忠裕は三十一年間老中を勤め、終りには功により一万石を加増され六万石となっている）

大山の大庄屋園田家は篠山領の北西にあり、氷上郡と境を接し、測量方が最初に足を踏み入れた街道筋にある。

平成五年大山の園田家文書が関西大学に寄贈され、その中に丹波測量に関係する文書が十一冊発見された。そして、『関西大学博物館紀要』の創刊号・第三号・第五号に、測量関係の文書が全部翻刻され発表さ

れた。

『測量方御休泊用・御案内手続覚書』

『測量御用手控帳』

以上三冊が準備をした記録で、その中の一冊『測量方御休泊用・御案内手続覚書』を紹介したい。

この文書は篠山へ二回測量に来た内の二回目、文化十一年の記録である。



測量方御休泊用・御案内手続覚書

(表紙) タテ三四・五 ヨコ一二・五

此御次の間御荷可置  
久保木様 尾形様  
笠原様 壱ト間

壱  
測量方

御休泊用并御案内手続覚書

覚

此度測量御役人、当郡御通行・御

休伯割、左之通

二月三日

柏原△御越

御泊り 追入村

三日御着早ク候ハ、御中食用意

四日

御昼中食 味間新村

同日

御泊り 大山北野村

(五日～十一日間略)

右之通ニ御座候

御名前左之通

一 御本陣

一 伊能様

一 壱ト間

別御本陣

一 今泉様

一 壱ト間

一 門谷様

一 壱ト間

此次荷物一ト間

一 御家來衆

一 一ト間

一 荷物置

一 一ト間

右、御泊り御本陣并ニ別御本陣共、  
麻上下ニ而村境へ出迎、翌朝村境へ  
御見送之事

手札認方左之通

御本陣何村

誰

但しふたとも

惣輪膳椀 十五人前

手たらい 五ツ

釣台 弐ツ

但し棒共

桐油 (とうゆ) 弐

机 五つ

右之品、御泊り之村より前御宿江受取ニ可被遣候

則、右之釣台ニのせ候共式指（棹力）、風呂桶式荷、人足六人

之積リニ候

一 蜂燭壺泊り、式拾四挺宛相渡し可申候間、是ハ河合宅へ受取ニ

可被遣候

但し高張壺挺ニらうそく五挺宛、星測壺挺ニ同壺挺ツ、

(略三行)

一 木地三方 三ツ

一 刀掛け 八ツ

一 毛氈 三枚

一 油・らうそく

一 草履・草鞋等

右、其所々ニ而御用意可成候、尤昼ハ酒用意ニ不及候

一 御幕 五張

一 下駄 拾三足

右者、御途中御入用難斗ニ付、通し人足ヲ以、御供申付候事

一 郡御奉行様上下五人

右、御泊り有之候處へ御出張、御止宿被遊候、此御料理向も、

料理人一緒ニ引請候事

風呂桶

四ツ

塗三方

三ツ

熨斗

三抱

但し竹共 御高燒灯

八張

御幕

五張

但し御泊り之場所斗ニ而、御昼休之處へ者御出不被成候間、

御中食用意ニ不及、御泊り之處ニ而 三飯差上可申者、刻限

遅速より、時宜之御取斗可被成候

一 御先払両人、右者御泊り・御昼共、其所々ニ而用意可有之、尤

料理人一緒ニ引請、罷在候事

一 御用掛リ三、四人 右同断

一 給仕人拾式人程御用意可然、尤女無用、男子袴ニ而相勤可申事

一 御宿手伝へ人足井ニ掃除共、御一泊二十式、三人位之御用意ニ

而可然哉、尤時宣之御取斗可被成候事

一 御菓子差上候ニ不及旨、被 仰出候得共、少々料理人方ニ用意

罷在候間、村々ニ而菓子用意ニ不及、尤御泊り之村ハ、菓子盆

五ツ六ツ御用意可成置可然候

一 八ツ時頃ニハ御本陣へ到着御座可有間、其節御昼御膳差上、又

口（虫損）御飯御夜喰相兼、暮頃御膳差上可申、此時御沙汰候

ハヽ、用意之御酒差上候事

一 御膳之上、亭主罷出候上ニ、御料理之儀、御触通りニ相隨ひ候

様、地頭役所ニ而被申達候ニ付、餓末之御膳差上候段、御断口

上可申上旨、被 仰渡候

一 御昼用意之儀者二里半迄之所中食ニ不及、三里ニも、およひ候

ハヽ、中食可被成之旨、被 仰聞候ニ付、用意之事ニ候

一 万事取斗ハ叮嚀ニ可仕旨、 御役所ノ被 仰渡候間、此段御

承知可被成候

一 御払米代白七拾匁替位

一 本賃御口給有之候ハヽ、是迄之御例ニ可被成旨、可申上事

一 測量御役人様、上下拾三、四人之由ニ候

一 御夜具、御三人様方御持參之由、先達而申触候得共、此度篤与

承り合候處、伊野（ママ）様斗御夜具御持參ニ候

其余者御夜具御用意可被成候

一 伊能様御火達者、紬之ふとん、其余者木綿風（布）団ニテ宣候

一 御たはこ盆之きせる、持來候ヲ能清メ、差出シ候様被 仰出候

一 燭台ハ不用、あんとう（ママ）ニ而宣敷候

一 御泊り御本陣ニ、東西拾坪斗、南北見晴場所用意之事

一 御通行案内之事

一 翌日御通行筋之村々庄屋中、羽織袴ニ而、未刻頃御前宿へ罷出、

一 御機嫌伺、帳面差上可申候

但し大庄屋ハ罷出ルニ不及

追入村庄屋

同村間屋

右、柏原御宿へ罷出、御機嫌伺、帳面差上可申事

一 大庄屋組境江罷出、手札差上、組境迄御供可仕事

但し着用、羽織袴

手札認メ方

何組大庄屋

誰

右奉書ニ可相認事

一 庄屋村境江罷出、手札差上、又村境迄御案内可申事

但し 着用もヽ（股）引わりんす

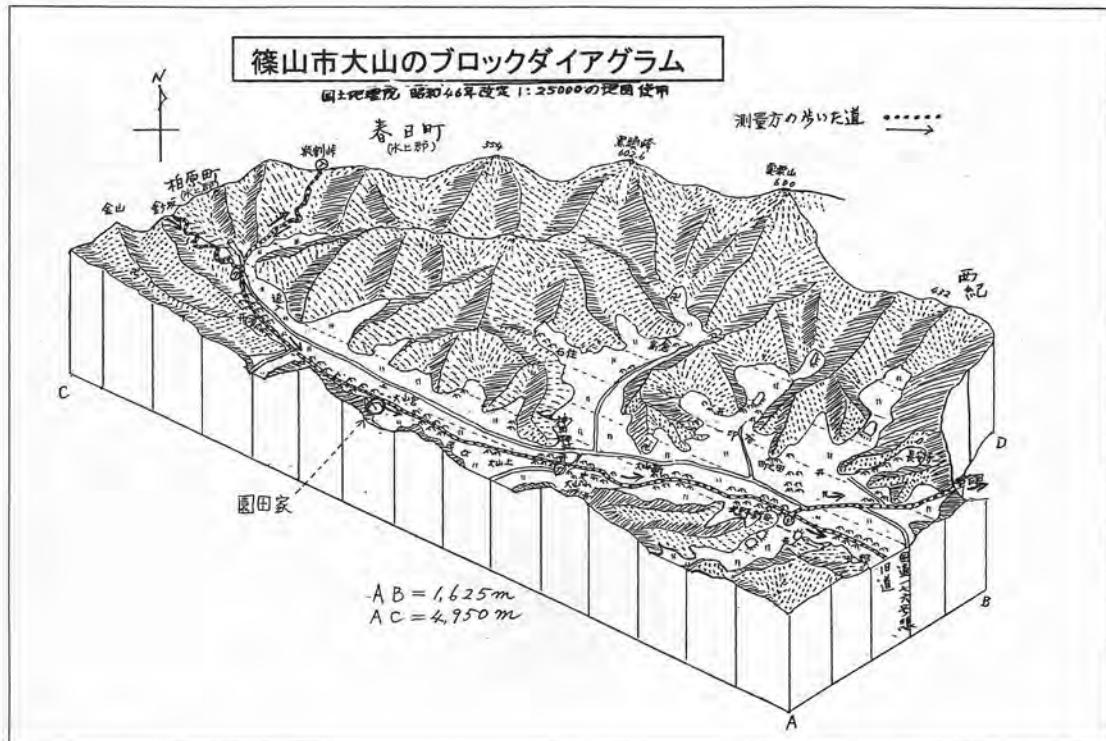
手札認方

何村庄屋

誰

右、上杉原紙ニ而可認メ

一 御通行先、簪持御出し可被成候



御通行当日、村々牛馬留メ御申達、且跡先キ見歩使差出し置、人留メ可仕旨、今日被仰出候、御承知可被成候

人留メ可仕旨、今日被仰出候、御承知可被成候  
御通行村々不淨所へ、まく引二而も覆候様、被仰出候間、

村々江御通達可被成候

右之趣、御承知可被下候、且御休泊所取斗方、文面不行届之儀  
可在之候間、宜敷御心添被下度賴上候、以上

御用掛

戊二月朔日 明山權太夫

樋口庄左衛門

覺

人足百拾人  
諸御荷物

同式拾壺人 梵天持

8

右、柏原御領分々追入村御本陣迄之分、追入村問掛合之上、大山組々御引請ヶ御取斗可被下候

二月四日朝七ツ時揃

人足百三拾壺人 追入村

四十一

内廿三人 梵天竹持

才覺成者撰立

四十五人 木ノ部  
四十五人 野尻

二月五日朝七ツ時揃

人足百三拾壹人 新田村

内

五拾老人 古佐組

内式拾老人 梵伝持

右同断

四十人 坂井組

四十人 大沢組

二月朔日 御用掛り

追而申上候、先達而人足割触置候処、御休泊間違二付、今日改而割触仕候間、此帳面之通、人足御出し可被下候

用意人足

この間破損

(六日～十二日分略)

右之通 人足刻限無遅怠、御出し可被成候

御本陣之隣村ニ而人足拾人ツゝ、不時用意之手当、置可被下候

人足式拾人二、引纏庄屋老人ツゝ差添、其所々江相揃、御用掛

り罷越居候間、相届ケ候様、御申含可被遣候

人足之者、立杖持參候様、御申付可被成候

引纏庄屋并人足

茶所左之通

追入村 利左衛門

太田新田 杉右衛門

(七ヶ所略)

右之通、御承知可被下候  
尤、刻付被成、早々組繕ヲ以領達、  
留り組ダ河合宅へ御返却可被成候

以上

三日昼から

又右衛門

一 笹山へ届  
御触書并追入村

宿質之儀窺

同日

一 供老人

上村

勘七

(注) 横帳の末尾が破損しているため、文書のつながらないところがある。破損部は何行にもわたる破損である。

篠山の方から、「柏原藩などは忠敬が泊っている本陣へ、藩士が若党・槍持・草履取りを従え挨拶に出向いているが、笹山藩は『当所町奉行浦上半十郎、町方に控居口上の届』と『測量日記』にあるように、粗末な扱いをしているのではないか」という意見があつた。  
しかし、この「御案内手続覚書(手順覚書)」のように、細かいところまで気を配り、落度のないよう手はずを調えた様子がよく分かる。

手札の書き方、挨拶に出むく服装

食事の時、本陣亭主の挨拶の仕方

不淨所はまくででも覆うこと

梵天持は才覚なる者選び立て

本陣の隣村に人足十人ずつ、不時用意の手当として置くこと

人足武拾人に引まとい、庄屋老人ずつ差し添えること

等々、気配りに万全を期している。

以上のような計画を大庄屋に指図したのは御用掛りである。

『関西大学博物館紀要』の第五号の末尾に、木村修二氏が次のように書いている。

御用掛とは、正式には測量方御用掛とよばれ、篠山藩が伊能隊(II)測量方・天文方を迎えるにあたって創設した臨時の部署のようである。任命の経過は不明だが、領内の大庄屋・庄屋の中から適當な人物を選んだらしい。

とあり、園田家文書や『測量日記』から拾上げると、次の人物である。

大庄屋 明山権太夫

野々垣村大庄屋 樋口庄左衛門

宮田村庄屋 九右衛門

町庄屋

兵左衛門

東岡屋庄屋 磨八

『関西大学博物館紀要創刊号』から転載の許可を藤田實教授より頂く。

これらの人達の相談だけではなく、篠山藩の指示を沢山受けたものと思われる。

あとがき

これまで青山下野守忠裕は老中職にありながら、測量に全然関係がなかつたと思っていたが、「伊能忠敬研究」第二四号の二十一頁で次の記事が明らかになつてゐる。

(九) 測量に関する触書 (文化十二年) 小森正和家文書

申渡書

(前略)

一 堀国先ヨリ江戸頌曆所江御用状差出候儀も有之候ハ御用便ヲ以可相届、江戸表ヨリ堀国先江御用状差出候節心當之場所可相達候間、其所江到着以前候ハバ着之上相届、出立後ニ候ハバ先々相届候様可致、右之趣土大炊頭殿・青山下野守殿被仰渡候間申達候

(後略)

篠山藩に届けられた触書は、文化八年九州第二次測量に江戸を出発する時のもので、同じ文面である。しかし青山下野守の名はなく松平伊豆守(老中首座)だけである。

園田家文書の中に今泉と笠原の名が出ているが、今泉又兵衛は別動隊、笠原三之助は福知山から江戸に帰り、篠山には來ていない。

(よ二)がわ じゅんいちろう・郷土史家、兵庫県柏原町)

## 岩城島の伊能測量文書 その二

伊藤栄子

(編集部)

本号では、第三〇号で紹介した岩城島文書のなかに出てくる尾道町の筆役文蔵が収集した情報の全文を掲載することにした。文化二年（一八〇五）九月二九日京都伏見から出された忠敬の先触れは、一月十四日隣の弓削島の大庄屋村井小右衛門から岩城島の庄屋友右衛門に知らされた。友右衛門はすぐ大庄屋に報告するとともに、一五日には情報収集のため、聞き合いの使者を因島に派遣した。

使者は、因島では情報が得られなかつたので、尾道までいって、赤穂で調べた情報を聞いて書き留めてきたという状況は三〇号に述べたとおりである。文書は他へ貸しており、なかなか見せてもらえなかつたが、やつと写しを取り、一二月一日に帰村した。以下の文書は尾道町の文蔵が赤穂へ調べにいって聞いた報告の全文である。赤穂市に所蔵する伊能測量文書と比較しても、聞き書きとしてよくまとまっているので収載した。

注記は編集部が担当した。

公儀天文測量御役人様御順國諸仕構并備前  
片上、赤穂御領坂越浦為外聞罷越候聞書写共

一、御上式人壹間 一、御次七人壹間 一、御下六人壹間  
メ三間入申候

丑十月

一、御上様夜具四人分御持參、残拾壱人新鋪木綿夜具

一、御酒肴は入不申候

一、御荷物之置場三間入申候

一、御本陣門前もり砂有之御道筋町難計

一、御本陣前二箱番所 但シ御城下計

一、御紋付挑灯式張

一、御幕なし

一、御本陣前二箱番所 但シ御城下計

夜具といえば布団のことであるが、四人分持參していた。忠敬、高橋善助、坂部、下河辺の四人らしい。夜具持參とは現代からは想像がつきにくいところである。残り一人分は木綿で新調、これでも豪勢である。御上は忠敬と高橋善助、御次は下役と内弟子・供侍、御下は棹取りと從者であろう。荷物だけで三部屋も必要だつた。ボリュームが想像できる。城下では、宿舎前に箱番所が設けられた。盛り砂は道筋全部ではなかつたらしい。

一、測量御道具御差図之所々ニ居（スエ）置候事  
一、料理向一汁三菜 但シ給仕人六人程小遣共  
一、御本陣亭主問屋前宿へ出候義無御座候  
一、御菓子三ヶ所江出ス、尤菓子を凡式拾目位買調三ヶ所江分ケ出申候 其外音物ケ間鋪義無御座候

一、浦々大形（ママ）陸路御廻、若陸地難相成場所ハ其所へ小船差出  
一、五郎兵衛繩打所ハ此度は測量無御座候由、噂有之候  
一、浦辺不残式拾間計之くさりニ而御打被成候由

但縄ニ而ハ水ニつかさ（ママ）り、延ちゞミも有之由

一、他村たりとも見へ掛り之島は凡ニ書残候事

一、絵図隣村分間ニ不及、荒方認置候事

浦々はおおむね、陸路を測るが、陸地を測り難い場所には小船を用意する。

間五郎兵衛が以前に測った部分は測らないとの噂である。海岸を二〇間くらいの鎖でお測りになる。繩は伸び縮みするからとのことであると記す。大谷『伊能忠敬』では鉄鎖は一〇間となつてゐるが、もつと長い二〇間くらいのものもあつたことがわかる。提出する図面には他村でも見える島はすべて書き上げるよう求められていた。ただし、他村部分の距離は書き入れないという。当然だろう。

一、書上は美濃紙堅紙ニ而細筆ニして相調候事

一、御宿不審番付置候事

一、勘解由様御年六十計 御歩行目附格

一、善助様 同 二十計 御小人目附格

一、島々不残御廻り、あの島へ何程と御尋之節先年より里程何程と申  
參候段申上ル

一、浦辺砂先と相見候處、砂之形チ少シ渡（カ）置候事  
此義は別而念入御申候、又岩組掛候處ハ其形書置絵図面ハ至而念

入候事

御宿には不寝番を置く。格式については、忠敬はお徒目付、高橋は御小人目付くらいの扱いとある。これは藩からの指導だった。砂洲は砂の形を絵図に書き入れ、岩組の場所はその形を丁寧に書くとある。

一、院号寺号共○□ノ内ニ書候而も、又ハ其脇ニ書候而も不苦

一、村々役人袴羽織ニテ夜分御機嫌伺ニテ御宿へ参ル

一、御小休なし

一、御泊風呂三本 但シ湯桶ニ而も

一、御膳は上下共 総輪之膳

一、御本陣ニ而拾坪計之場所入申候事 但シ夜分測量御立被成候場所  
也

一、人足七人、馬六疋、長持壺棹、持人足

伊能勘解由様

平山郡藏様

高橋善助様

稻生秀藏様

坂部貞兵衛様

下河辺政五郎様

小坂寛平様

門原（ママ）清左衛門様

此四人ハ御先触表ニ有之候 御先触之内ニハ此名無之候得共写取

門原は門谷の間違いだが、大阪から市野とともに帰府しているから、ここにはいない。侍・佐藤伊兵衛の間違いだろう。伊能、高橋、坂部、下河辺は先触れに氏名があり、平山ら内弟子は先触れに名はなかつたという。先触れも色々あるから定かではない。村役人は羽織袴で宿舎に挨拶に出る。風呂は身分別に三ヶ所設けられた。お膳は上下とも金森宗和の考案した総輪膳が用意された。

勤方人足覚

一、ほんてん持六人 一、くさり持四人 一、台持三人

一、竿持老人 一、箱持老人 一、かます持老人

一、たばこ盆持老人 一、刀持六人 一、両掛け持老人

一、床机持老人 一、乗物持四人 一、先払式人

（先払い）是ハ向役人か年寄相勤事

此分三拾壱人 此人足繼村迄相勤可申との事

但シ飾万（シカマ）津より姫路迄入用人足高百人

一、御請印帳差上候時は

岡方總代誰印

海方總代誰印

問屋方總代誰印

右之通差上候事

一、用意三尺位之杭木六本程

一、浜辺ニ而入用五尺位之杭木武三本

一、浜辺掃除別而念入候事

一、こへ壺、雪院（隠）よしず囲ひ之事

一、改村より繼村江何百何拾何間

但繪図面之端ニ書入候事

一、毛せん、薄べり式拾枚、筵式拾枚

天測場用である

一、村境江杭木立置事

但シ三尺計、是より何村東西分り

測量作業の直接応援に必要な人足は三二人。よくいわれる膨大な支援要員には多数の間接要員を含んでいる。測量現場の実際の応援要員はこんなものだつたろう。人足は通し人足を求められている。泊まり触れが廻ってきたときの、引き受け印は、陸路と海路、宿場の責任者が連印する。杭を用意し、浜辺の掃除を丁寧におこなう。露出した便所、肥壺はよしずで囲うとある。毛氈、薄縁、筵は天測場の設営用である。



現在の塩飽諸島・四国側の丸亀城から望む

飾万津御泊十八日御献立

御座付 三宝熨斗匏

本膳 皿 いり酒 わさび

汁 松露 香物 御飯

鯉糸作り うどせん (せん切り力)

海そめん

菓子椀 とり 平皿 卷玉子

焼物 金頭 ひじき焼

三ツ葉 長いも しる茸

くだき柚

朝漬 汁 かぶら ちょく 摺ごま 皿 さけ ミそ漬

御夜食 たゝき牛房 御飯 山耕 (ママ) ぶり

引而 平皿 薄くず

鴨 土佐麩 木たけ

十月廿日

坂越浦大庄屋 湯浅四郎左衛門

日生宗藏様

岡崎門藏様

一、絵図は大庄屋一組切一紙相調候事

但シ大キ成候ハゞ二ツか三ツ相認、取合宜様三との御事

一、御宿大家無御座浦は式軒ニ而も不苦

但シ下六人御別り

一、向寺何宗寺領何程付居候哉と御尋、役人答何々と申儀銘々ケ様之類調懷中致居候計

提出絵図面は大庄屋の受け持ち区域毎に一枚とする。しかし大きすぎる場合は分けてもよい。大きい宿がないときは分宿してもよい。質問されたら從来答えていた内容と同じことが答えられるよう、懷中にメモを用意する

赤穂坂越浦大庄屋湯浅四郎左衛門より知セ

一筆致啓上候 然は御公役様最早近辺へ御越被成、一昨十八日室津御泊十九日家島御泊ニ而御座候 大方家島廿日、廿一日迄御座可被成と相聞申候 廿二日又々津津江御帰被成御泊ニ而御座候 則同津へ御荷物御残置家島へ御移り被成候 左候へば廿三日相生浦御泊、廿四日当浦御泊廿五日加里屋御泊と相聞申候 併先以御役人書積ニ而御座候此聞合ハ昨晚当浦より家島へ差遣し候 貞兵衛様ニ引合越罷帰申候 一、室津ニ而殊外御機嫌惡鋪甚混雜之由、煎茶至而御好キ之所少々惡鋪候而、夫故歎御氣ニ障り候由、尤夜具等之儀も矢張当辺は紬ニ相極メ申候先荒々申上候 委細は御聞合之御使へ及嘆置候 是より御聞取可被下候 御好キ御嫌 (キレイ) 之料理物等書取候而懸御目申候 尚相替義も御座候ハゞ追々御知らせ可申上候 猶又右之趣片上伯父江も早々御通達可被下候 段々近寄取紛レ乱筆御用捨可被下候 以上

室津では忠敬の機嫌が悪くて困ったという。お茶がお好きなのに、悪い茶を出したからいけなかつたとあるが、にわかに信じ難い。何か他にもあって、たまたま、きつかけとなつたのではないか。そのせいというわけではないと思うが、忠敬の食べ物の好き嫌いの情報を知らせていく。

御禁物類

魚類 ふ きくらげ ゆば いりこ  
よきものは

かぶら 大根 人参 せり 鳥 玉子 長芋 れん根 くわひ  
豆ふくり 菜 椎茸 軽節ハよし

横から見ていての判断だろう。好物は海から遠い農民の食べ物である。

一、大庄屋初村役人名札入申候事

松平上総介殿領分

備前国和気郡片上村

奉書二而三寸五歩位村境二而差出候事

一、離島之間数相改候事

一、塩浜ハ薄ごふんニ而繪図面へ書入候事

一、播州ニ而ハ御乗船六拾石位之御船式艘二而、純子杯之御幕御打有

之、浦々漕船も付居候事

換拶の際に差し出す手札（名刺）の書き方、寸法を記す。離島も測量をする。

塩田は絵図に薄いごふんを塗つて表示する。播磨で忠敬らに提供した乗船は六

○石くらいの船二隻で、漕ぎ舟（引き船）も付属させた。

片上仕構手組

一、御宿御本陣 但亭主上下御迎送り

但シ御門前立砂手桶

一、御迎送り、名主三人羽織、袴二而相勤候事

一、御先払

一、御案内、羽織袴着之者

一、海辺間数取有之節も名主三人付添、大庄屋老丁程跡より付廻り仕候 尤御手分り御廻り被成候儀も有之候ニ付、功（ママ巧）者成者四

五人袴羽織ニ而罷出候事 是は御尋事御座候節、御答申上候手筈也

一、御料理向一汁三菜、御夜食并酒肴等も出し申候 尤熨斗ハ床へ居置事

一、往来筋両端へ杭木之事

幅四寸 長四尺 是より東片上村分

是より西片上村分

一、御乗船は四拾石位之商船式艘、御国間之御印付御幕打申候 但播州ニ而ハ御乗船出申候付、大庄屋より伺出致有之由

一、御代官様東西御国境御勤事

一、御領分中御付廻りハ御足輕小頭、供老人御連被成候由

一、片上町御奉行様御本陣ニ而御名札御差出、御用等も御座候ハド可

被仰付段も被仰上候事

但先達而御勤方之儀御國方へ御伺ヒ御座候所、前段之御格式故例

御普請役様御通行之趣ニ而御勤可然由ニ付、此度も御勤被成候事

一、海辺浪打際ニ而間数を打置事、尤陸御運び相成候所は通道ニ而間数取いたし、右間数を以分見ニ而繪図面仕有之事

片上における扱いである。名主（庄屋）三人が付き添い、大庄屋は後から数人の気が利いた予備員をつれて従つた。手分けをすると、何か（予想外のこと）聞かれたとき、答えられる用意だという。料理は一汁三菜で夜食のあと酒肴も出している。酒肴だけということはないから、酒も出したろう。下僕が買ったか、求められたので少し出したということだろう。原則は禁酒だった。藩からは、代官が国境まで出張して指図し、領分中の付き添いは、足輕小頭

が供を一人連れてしたがつた。格式については藩に伺つた結果、前に述べたような情報なので、御普請役の通行の例でよいと指示されていた。つぎに書き上げの例が続く。

### 書上美濃紙豎紙

松平上総介殿御領分備前国和氣郡片上村

一、御高四百六拾弐石弐斗弐升

一、町數拾壹町

一、宮内總人家三百六十壱軒

一、人數千三百七拾八人内 男七百拾弐人  
女六百六拾六人

一、御定人馬 弐拾五疋 弐拾五人

問屋 七右衛門

五人組頭 太兵衛

往還名主 門兵衛

名主 勘兵衛

大庄屋 大助

真言宗高野山西南院末寺

一、寺院拾軒 内七軒御瀧山真光寺 除地寺領 弐拾六石六斗五升三合

淨土宗大雲寺末寺

壱軒 潮音山大長寺 右同断 三石弐斗

法花 (ママ) 宗京都妙覺寺末寺

壱軒 常照山法鏡寺 右同断 三石八斗三合

一向宗京都西本願寺末寺

壱軒 潮光山正覺寺 除地寺領なし

京都吉田殿支配

一、神社四ヶ所 宇佐八幡宮 壱ヶ所 除地社領八石九斗九合  
兼尊大明神 壱ヶ所除地社領なし

内 蝋子 (エビス) 宮壱ヶ所右同断

荒神宮

壱ヶ所右同断

一、社方四軒 内神職老人 松末清輔 下神人三人、神子弐人

一、東片上村境より伊部 (インベ) 村迄道法凡九丁三拾壹間、内五丁

三拾壹間宮内人家、四丁野合

一、清水村境迄通道凡拾九丁三拾弐間野合

一、難田村境迄凡拾九丁四拾間野合

一、浦伊部村境迄同凡三丁野合

一、浦長凡弐拾六丁四間

一、往還より海辺迄同凡壱町拾壹間

一、古城跡富田松山 但シ城主浦上近江守国秀

一、遠山梶 (クチナシ) 島見へ渡凡海上壱里 但シ難田分

一、御朱印地無御座候

右之通町寺丁長、家数、人別、寺院社共書面之通相違無御座候已上

問屋

七右衛門

太兵衛

門兵衛

勘兵衛

同浦伊部村

一、御高  
一、御林壱ヶ所 但立木松  
一、村内總家数 一、人數 内男女

一、寺院  
右之通

但シ此先払之儀は御国ニ而 組頭類股引脚半ニ而、小脇指帶シ  
壱人罷越候

五人組頭 次兵衛

名主 十八郎

但右順ニ三ヶ所一紙ニ書載有之候得共、文言同様故略 年号月日

伊能勘解由様御一名宛仕候由、尤是等ハ前宿之振合見合候と書入候事

一、市町ニ而手桶夜分掛け燈軒別ニ出候事

附り御道筋へ小路より出口ニ而用捨垣致有之事

一、御宿門出口盛り砂行義手桶之事

但シ御宿入口赤穂様御紋付丁ちん式張

一、十八日室津御泊十九日同所より絵島へ御渡、廿三日又々室津へ御戻り廿四日迄御逗留、廿五日相生、廿六日坂越、廿七日新浜夫より赤穂御城下加里屋へ御移、三四日も赤穂御領御掛り、十一月朔日頃備前御領福浦へ御移被成候ハ、岡山辺之福浦より十日余も御懸り可被遊哉と、片上之噂ニ御座候

右備前岡山井片上駅迄罷越承り合之所、尾道町筆役文藏儀も同様罷越候ニ付申談、片上駅名主門兵衛より供（ママ）々承り合候趣如此御座候

十月廿六日 坂越浦ニ而諸仕構頭書写し見聞仕候趣、

但シ書ニして申上候

一、前々宿へ村々役人総代として役中五六人も参候事

但シ御国方ニ而此役人之儀は、庄屋之類前々御宿へ罷越し分見測量杯被成候御様子見請、其趣ニ取計為心得罷越候義と奉存候 尤外ニ御前宿迄は翌日御順行之様子聞合候 旁々御通り筋之庄屋不残御機嫌窺罷出候趣御座候

一、御通り筋道作り之事 海辺土手筋も同断之事

一、御通り筋野坪（肥壺）雪院（隱）こも塙之類ニ而囲ひ有之候事  
一、御通り筋御案内ほうき引壱人、木鍬持壱人先払壱人其次へ年寄

一、御宿前箱番所之事  
但シ片上駅ニ而承合候處ニ而は、此箱番所御域下ニ限り候趣ニ御座候所、坂越浦ニ而御宿脇ニ仕構御座候 勿論御城より同心衆式人御詰メ、赤穂様御印付挑灯式張御座候

一、御昼賄ひ之事

但シ此昼賄之義ハ御泊所より小船ニ而持出し、御途中野合ニ而も御好披遊候節指出候趣ニ御座候 其節之用意持歩行押まくり、毛せん等御膳出し候様子ニ御座候

一、自身番辻堅（固）メ之事

但シ式間口位之家筋幕ヲはり飛口陣笠之類飾り、小役之者相詰メ火廻り相勧メ居申候

赤穂領坂越浦の扱いである。先払いの役人は、股引、脚はんで、脇差を帶びていた。案内といふよりは、警備の態勢だった。町筋では手桶、掛け提灯といふから、お祭りのよう歓迎である。宿には赤穂の提灯を二個掲げ、脇に箱番所を設けて、お城から同心が出張った。町内では、二間間口くらいの家を借りて、幕を張り、篭口、陣笠を飾つて自身番を設け、浦役人が詰めて火の廻りを務めた。一段と重い扱いだったようである。

つぎは天測場の用意である。

一、御宿之内十坪計明地用（意ぬけ カ）之事

但シ明地之義夜分測量御用御座候由 場所柄之義は北方明キ候  
方角御好ミ被遊候由ニ御座候 坂越浦ニ而御宿之内明地無御座  
候ニ付、壱丁程隔り明地御座候而此所仕構御座候 尤五間四方  
之所筵ニモ之類ニ而高サ壱間程ニ用ひ、入口半間ニして此所江  
赤穂様御紋付御丁ちん式張井此所御入用之品左之通ニ御座候

毛せん 式枚

まぐり 式十枚

（まぐりは方言で薄ベリの事）

筵 式十枚

（まぐりは方言で薄ベリの事）

火鉢 三ツ

（まぐりは方言で薄ベリの事）

屏風 半双

（まぐりは方言で薄ベリの事）

机 壱ツ

（まぐりは方言で薄ベリの事）

はしご 壱ツ

（まぐりは方言で薄ベリの事）

御茶、多葉草（タバコ）盆

（まぐりは方言で薄ベリの事）

御刀掛 壱ツ

（まぐりは方言で薄ベリの事）

かけ矢 壱ツ

（まぐりは方言で薄ベリの事）

但シ明之物之義は先方御持參被遊候御様子見請申候

（まぐりは方言で薄ベリの事）

宿の近くに空き地がないので、一丁ばかり離れたところに、五間四方の場所

（まぐりは方言で薄ベリの事）

を筵・こもなどで囲い、高さ一間くらいにして、天測場を作ったという。入り

（まぐりは方言で薄ベリの事）

口は半間にして赤穂藩の提灯を出した。浦島測量之図のイメージから、天測場

（まぐりは方言で薄ベリの事）

は幕で仕切られたと思っていたが、筵、こもで仕切った風除け付きの天測場も

（まぐりは方言で薄ベリの事）

あつたことがわかる。ここにかかげられたのは、天測場に必要な用品である。

（まぐりは方言で薄ベリの事）

御本陣用意

一、御菓子 但シ金平（コンペイ）糖、有平（アルヘイ）糖、松風之類  
差出シ申候

一、御茶 但シ御茶ハ是迄多ク一森（イチモリ）（一森は山城産の茶）  
ヲ指上候趣御座候 御茶わん錦出（手）足高茶台、都而土

びん茶之外不被召上、至而御茶御好ミ被遊候様子ニ御座候  
但シ黒ぬり之類

一、多葉草盆 但シ三間ヘ差出候事 御上下共

一、御刀掛三通 但シ三間ヘ差出候事 御上下共

一、縦輪椀 但シ三間ヘ差出候事 御上下共

一、御料理一汁三菜 但シ黒ふち金ニ而御座候

一、夜具 但シ御上四人様御持參、四人様紬、六人様木綿  
不入水（ママ）洗つた物ではない新調の意か）火燄

ふとんハ紬之類差出候由ニ御座候 用意之事

一、風呂三本 但シ拾四五位之若衆袴着相勧申候

一、給仕人六人 但シ拾四五位之若衆袴着相勧申候

一、燭台式ツ 但シ赤穂様御紋付壱張ヅゝつり置御座候

一、御荷物宿 三軒 但シ赤穂様御紋付壱張ヅゝつり置御座候

記述はますます具体的である。

一、御用御長持 壱棹

御用御長持 壱棹

御用御絵府（絵府は荷札のこと）式枚、御番札壱枚、間竿式本、  
合羽壱枚、銅たらい式枚

御用御長持 壱棹

御用御長持 壱棹



### 談話室だより

#### ○伊能測量の歌をつくりませんか！

現職のときは、隠居の道楽だと、逃げ回って出たことがないライオングクラブの講演会に呼び出されて、定まった儀礼式があり、齊唱する歌があることを知り、伊能忠敬研究会の会合にも皆で唄える歌がつたほうがいいな思いついた。

佐原高校の歌という案もあるが、研究会としてはそうもいくまい。ためしにと歌詞を考えてみた。会員各位の御意見をお伺いしたい。曲は行進曲ふうならどれでも合う歌にと思うが、合致したものを使わしてもらえばいいだろう。

試案として渡辺・渡部で次のようなものを考えてみた。

#### ■第一次伊能測量の歌

一、蝦夷地に向かって 二千キロ  
歩測、天測、下図書き  
朝六つ早く 出立し  
暮れまで挑む その姿

二、四十(よんじゅう)キロを 一日で

心ははやる 三廻へ  
津軽海峡 風を待ち  
時は今よと 船出する

#### 五、道なき場所は 船により

ついに達する ニシベツ  
これより先は 人がなく  
天測のみで 引き返す

#### ■第二次伊能測量の歌

一、蝦夷地の地図の 出来栄えに  
ふたたび下る 台命は  
本州東岸測量せよ  
喜び勇んで 策を立つ

三、宿、到着後 天測の

準備にかかる 入念に

食後の休みの いとまなく

勾陳(こうちん)、房宿(ほうしゆく) 星を追う

ナレーション 「勾陳第二、南中

三八度五〇分

勾陳第二、三八度五〇分 よし

つぎ 房宿第三、五六度四分あたり」

四、地獄に仏の 難所越え

測量進む 蝦夷南岸

エリモ岬の峻険は

門弟間宮の 力かる

二、間繩揃えて 歩測やめ

羅針の方位は 二度測り  
遠山目当ても 確実に  
作業手順も 確立す

三、景勝の地 松島や

峻険迫る 三陸は  
海上遙かに繩を張る  
徹底したる 量地術

四、人跡まれな 下北の

半島進む 伊能隊  
御用の旗に嵐吹き  
駕籠は飛ばされ 人は伏す

五、東岸地図の 仕上がりに

幕閣いたく 感動し  
東日本を測らせる  
御用の人馬も 聞りて

ナレーション「刻つき！ お先触れだ

ご苦労、わかつた

書き役を呼べ、人足を起させ  
村継ぎだ」

第三次測量以下はまだ公開に至りません。諸賢兄姉の傑作を歓迎します。

総会で大合唱が富岡八幡宮境内に響くのを想像しています。楽しみですね。歌う人、録音してくれる人も募集しております。

（渡辺一郎・渡部健三）

左記は別名「鉄道唱歌」で有名です。借用しては？

栗林字一 作曲

(明治34年頃)

伊能測量隊行進曲 (第 次)

栗林字一 作曲

(明治34年頃)

えぞちにむきて にせんき口

ほそくーてんそくしたずかき

みけむつはやくーしゅつたつし

くれまでいども そのすがた

○日々の話題から

「伊能忠敬が下絵」中島描いた大島一円之図の講演会

江戸時代の測量家、伊能忠敬（一七四五～一八一八年）の生き方を学ぶ講演会が十四日、愛媛県温泉郡中島町大浦の町総合文化センターであり、伊能忠敬研究会代表理事の渡辺一郎さんが講演。町民ら約八十人が参加した。

中島町教育委員会主催。渡辺さんは、同町が保存している中島を描いた地図「大島一円之図」について説明。「この図は、一八〇八年（文化五年）に伊能忠敬の測量隊が測量したものだが、伊能図とは絵の描き方が違う。下絵を伊能が描き、島民にあげたのではないか」と考察した。

また、事業家として成功した伊能が正確な測量をするための曆学を志すきっかけについて解説。「伊能は、隠居後にもう一つ何か成し遂げようとする強い気持ちがあつた。興味があつた曆学に取り組み、自宅周辺を歩測する地道な作業から、やがて日本全土を測量するという偉業を実現した」と述べ、「皆さんも一步踏み出す勇気を持ち、何かを始めてほしい」と呼び掛けた。

会場では「大島一円之図」の原図を特別公開。町内に残る伊能測量隊に関する古文書も展示され、興味を誘っていた。

愛媛新聞から  
14年12月19日



## 伊能忠敬の生きざまに ついて語る辯証きん

□広告はクリエイティブに「忠敬さん

しなやかな挑戦精神。

約束を守るために頑張る。それが世界最高峰の実業家日本をつくつてあげて、  
世界で活躍の余地がない。  
彼らの情熱を仕事にして、その情熱を高めていく。

「グローバル ニッセイトップ」  
世界のニッセイ市場でNO.1  
日産重工は世界で一番、世界ではじめて、世界  
そんなモノづくりに心をかけてきました。  
これからも日産技術をベースに、  
オートレトワード リコ二タクからメディカルまで、  
時代が求めめる新しい技術を創造していきます。  
クリエイティブ・カンパニーを目指す。

# Global Niche Top

日東电工株式会社  
<http://www.nitto.co.jp>

〔しなやかな挑戦精神〕50歳を越えて取り組み、わが国最初の実測日本地図をつくりあげた。幕府や藩の命令ではなく、自らの情熱にしたがって、その偉業を成し遂げたという。伊能図の正確さをさえた技術力、年齢を超えた情熱、地図の重要性への時代感覚・先見力。難題を楽しみながらクリアするしなやかな挑戦精神……「クリエイティブ」だな。

(日経新聞 14.12.20)

□織本病院劇団「伊能忠敬」ビデオ鑑賞と懇談会

(2/15)

□哀悼・惜別 会員だった山住正己氏

## 第一部 伊能忠敬に関する「○」の質問 第二部 ビデオ総集編「伊能忠敬」

懇親会 渡辺代表他 13名参加

NHKO-B（元番組制作局長）の香川さんが主宰する「ヒューマン・クム」の例会に伊能忠敬研究会も自由参加で合同。テーマは、人間・伊能忠敬ということで、織本名誉院長と渡辺代表が講師になり、忠敬をテーマに会員相互で話し合いをしました。事前連絡の時期が限定されたため、参加呼びかけが会場近隣の一部の方になりました。

□伊能ウオーク番外編(三)「下北半島一周300キロ」の日程変更

今年の番外ウオーキングは下北半島です。当初一〇月の予定でしたが変更になっています。五月二六日から六月六日までです。伊能測量では第二次で下北測量をしています。享和元年（一八〇一）新暦では一月から一二月でした。雪の時期に入り、大雪に難儀の模様が記録に残っています。初夏の今回は大内隊長以下恐山から歩き始め、伊能隊とは逆にのの字の感じで、陸奥湾岸から時計廻りに半島を歩きます。ぐるりと海岸線を回り、六ヶ所村から野辺地へゴールの予定です。五〇名の限定歩行になっています。

照会先・日本ウォーキング協会（JWA）

TEL  
03  
·  
3295  
·  
1002

□大内惣之丞さんが歩行四万キロを達成  
14年11月

伊能ウオーケー隊長を務められた大内さんの今までの歩行距離が、「地球一周四万キロ」を達成されました。伊能忠敬の三万五千キロを越えて「千里の道も一歩からと」全国を歩かれています。

1 / 29 芝公園伊能忠敬顯彰碑

□伊能図を旅する「江戸ツアーニ」  
渡辺代表が講師。

江戸に残した忠敬の足跡

東京駅～芝公園（顕彰碑）～蛎殻  
町・終焉の地～隱居宅跡～富岡八

幡宮・深川不動尊・忠敬歩測の道  
・曆局跡・浅草・靈巖寺・松平定

信の墓・間宮林蔵の墓・深川資料館・源空寺・高橋至時、伊能忠敬、高橋景保の墓・東京八重洲口駅

## 「市民派教育学」を育成 山住 正己さん



自然の中にある広大な都立大の新キャンパスが気に入っていた。前年旦暮の新幹線通勤

ひと



○ お便りから

編集部注・抄録ですがご了承下さい。

□ 堀江敏夫さん・北海道苫小牧市

## 渡辺 一郎さん(73)

「氣せわしいが一つずつや  
らぬいと」。伊能忠敬が約一  
百年前に完成した日本地図の  
うち、もっとも詳細な「大図」  
(三万六千分の一)の展覧会  
を二〇〇四年に開催するた  
め、米国で発見した写しの復  
元作業に「伊能忠敬研究会」  
代表理事として取り組んでい  
る。

渡った地図もあるはずだ」と  
執念を燃やす。  
もともと日本電電公社(現  
NTT)のコンピューター工  
程シニア。二十数年  
前、全国の郵便貯金  
をネットワーク化す  
る仕事で悩んでいた  
とき、五十年代から全  
国を歩いて測量した  
伊能に関心を持つ  
た。



伊能忠敬研究会の  
会員には約二百三十  
人。「伊能学は天文や曆学、  
数学があるが、僕は技術屋だ  
から苦にならない。会員には  
教師、測量士などがいるし女  
性も多い。いろんな切り口が  
あるんです」と活動に自信を  
見せる。東京生まれ。

## きょうの 人

米国に保存されていた伊能図  
の復元、展示に取り組む

写しの多くは本来の彩色が  
省略されており、実物の美し  
さの再現は大仕事。つなげる  
と全長約六十㍍の大図を並べ  
る会場探しなど展示の準備に  
追われる。  
伊能が幕府に提出した完成  
図は火災や関東大震災で、全  
部焼失した。渡辺さんは伊能  
図を求めて日本全国はもちろ  
ん歐米も歩き、〇一年に米国



函館山にある北海道最初の  
測量地の銅版



室蘭市本輪西町にある伊能橋

今年はニシベツに行つてきます。

## □ 垣見壮一さん・新潟県

一月六日の新潟日報に、伊能忠敬の記事がありました。地方新聞が  
ここまで取り上げたことに感無量です。

小生、年末は佐渡真野湾佐和田町の海岸測量でした。伊能図記載の  
地名も多くなぜかなつかしい気がしました。  
拉致事件の現場も近く静かな田舎町に恐ろしい事件があつた」と  
に驚いています。(伊能隊宿泊地真野町、旧名新町、享和三年八月三〇

日）。測量終了後海沿いに車を走らすと、冬の小さな漁村は道も狭く人影もなく、二百年とあまり変わらないのではないかと感じました。仕事を離したら伊能・平山隊測量行程に従つて、佐渡を歩いてみたいと思つています。

(1/17)

#### □川上清さん・水戸市

昨日の茨城新聞にすぐろく絵図が掲載されました。これだけの記事が茨城県内に示されても、忠敬さんは常陸の国は一度だけ。そして記録らしいものを残していないとされるのが残念なことです。ただ一行書いた長久保赤水については生誕地高萩市が大事にしており、昨年は展示会が開かれ、四枚の変化を伴う輿地図が並べて掲載されました。赤水はすべて入手情報により地図を編んだものであり、忠敬さんとはまるで違った手法でしたが、一般利用の点では地元も誇りにしておられます。忠敬さんに可愛がられた間宮林蔵や古河藩の鷹見泉石も茨城の人であり、今の国土地理院ともからめ、地理地図に縁の深い茨城と言えるでしょう。

そんな初夢まじりの思いを持ちました昨日の新聞でした。 (1/8)

#### □高木崇世芝さん・北海道札幌市

先日『江戸の伊能忠敬』が到着し、拝見しております。書名がとても良いですね。それに内容も充実しており読みごたえがあります。特に「江戸日記」「宿泊地一覧表」は今後、貴重な資料として活用されることと存じます。

「江戸日記」には、蝦夷地に関わる人物が、たくさんでできますので精読するのが楽しみです。注釈は渡辺さんの記述との事ですが、当時の背景や人物について説明され、とても役に立ちありがたいです。

間宮、近藤（重蔵）は別としても、高橋三平や山田綱治郎が出てくるのは意外でした。近藤は当時、書物奉行ですが、ずいぶん何度も忠敬と会っていますね。

老婆心ながら以下、気づいた事を書いておきます。…… (3/17)

#### □佐久間達夫さん・佐原市

「伊能忠敬日記」と「伊能忠誨日記」の解説をして、「実測日本地図の祖」といわれている伊能忠敬の影には、多くの協力者がいたことをしみじみと感じています。

伊能家の家業や他家との付き合いや交渉などに献身的に協力した柏木久兵衛、大川治兵衛、漢学の師であり、地図作成に協力した久保木清淵。全国測量実施のために骨を折った桑原隆朝、堀田撰津守正敦など。これらの影の協力者の功績を見逃しがちです。伊能忠敬は幸福者（しあわせもの）だと思います。

(3/20)

#### □河西浩さん・山梨県石和町

全国すくろくは大変おもしろかったので、学校での教材用に拡大コピーして、裏打ちして利用できるようにしました。

(3/24)

#### □白根貞夫さん・横須賀市

31号に吳入船山記念館の記事があり、数年前、私が訪ねた時を偲んでいます。また、佐原高女校歌の作詞作曲者は横須賀中学校歌も同様です。

(3/28)

## ○お知らせ

### □『かわらばん』の発行休止

本号より『かわらばん』は本誌に吸収いたしました。特別に号外を必要と判断した場合には発行いたします。そのため本誌の発行頁に増減がありますが、ご了承をお願い申し上げます。本号は四頁増です。

『家牒』は筆者都合で休載いたします。

### □『江戸の伊能忠敬－伊能忠敬銅像建立報告書保存版－』発刊に

永らくお待たせしましたが、ようやく刊行に至りました。事前に申し込みされた方々には三月にお送りしました。この「報告書・保存版」は銅像建立の趣旨に、会報に連載しました「江戸の忠敬日記」を記録として残しました。主に都道府県立図書館、人口の多い市の図書館、会報の寄贈先などに配布されています。全部で一九五館になりました。残念にも二館からは不要ですと返却されました。ある市立図書館では「新着図書」として市民に発行が公開されました。

なお、全量配布済みで残部はないかもしれません。

### □『合本・伊能忠敬研究』発行(会報第二〇号から三〇号を収録)

会報の合本が出来ました。一一冊をまとめた上製本版です。ご希望でしたら一報下さい。送料込み実費で五千円です。

### □伊能忠敬記念館だより・収蔵品展の開催

佐原の「伊能忠敬記念館」では第29回収蔵品展を開催しております。陽気もよくなりました。佐原へお出かけのうえ、是非ご高覧下さい。今回の展示史料は重要文化財「伊能忠敬遺書并遺品」の中から伊能

図五点と書籍目録一点が特別に公開されます。

大図は文政元年(一八〇四)版の岐阜、滋賀、福井、石川県方面の六点が紹介され、書籍目録は伊能家が収集した膨大な蔵書を書き上げたものです。

伊能図大図(重要文化財・館蔵)

・自江戸歴尾州赴北国至奥州沿海図第十  
・自起至木本

第十一  
・自蒲生至蒲生

第十二  
・自蒲生至蒲生

第十三  
・自橋立至宮越

・リ 第十四之一  
自宮越至東岩瀬及永見又至分道今浜  
書籍目録(重要文化財・館蔵)

平成15年3月25日(火)～5月25日(日)

Tel 0478・54・1118

<http://www.city.sawara.chiba.jp/kinenkan/>  
これまで「ヶ月」とに順次公開してきており、29回目です。

### □平成一五年伊能忠敬研究会「例会・総会」の開催

日時 六月一五日(日)  
場所 東京深川・富岡八幡宮 結婚式場  
次第  
総会 一三時～  
講演1 一四時～

「伊能図から近代図へ」  
清水靖夫氏  
「伊能図の色彩について」  
浅井京子氏

懇親会

一七時

会費 七千円（含記念祭費）

（できれば伊能隊に出された食事の再現も）

お願い 出欠連絡、欠席時の委任状を同封ハガキにて、五月一〇日までにご返送をお願いいたします。併せて、次項の大阪旅行会の予定もお知らせ下さい。

□大阪旅行会の御案内

関西地区の伊能忠敬がらみの史蹟などを探訪する見学会を開きます。定員三〇名です。準備の都合上、参加希望の締め切りを五月末日とします。また、会費は八月末までに振込みをお願い致します。内容については渡辺までお問い合わせ下さい。御夫婦での参加も歓迎です。

一、期 日 九月一七日（水）～一八日（木）一泊二日

二、集 合 東京発の方 羽田空港 八・〇〇集合（JAL便）

大阪集合の方 伊丹空港到着口 九・五〇

または、新大阪駅

三、見学箇所（移動はすべて観光バスを使います）

第一日（一七日）

一一・〇〇 間観測所跡、麻田剛立墓、間重富墓

一二・〇〇 天王寺 統国寺脇阪口楼（普茶料理、有名なお店）

一三・三〇 大阪市立科学館 見学 一四・〇〇まで

講 話 「伊能忠敬の天文学」学芸員・嘉数次人氏

あと質疑応答など懇談会、終了 一六・〇〇

宿泊 有馬温泉・兵衛向陽閣 または 角の坊

（男女別 相部屋）

有馬温泉の一流旅館です。チエックイン後、研究発表などのセッションは自由です。企画の持込歓迎。ただし、準備はすべて提案者でお願いします。

第二日（一八日）

九・三〇 大阪歴史博物館（間重富関係の史料など見学）

一二・〇〇 昼食 太閤園

一六・三〇 伊丹発 大阪集合の方は途中または伊丹解散

四、会 費

東京発 四五、〇〇〇円、大阪集合の方は、三一、〇〇〇円の予定です。

五、参 考

現在のところ、参加がほぼ決まっている会員は次ぎのとおりです。

伊能夫妻、福田編集担当、前田幹事、渡辺夫妻、伊藤栄子編集委員、石川九州支部長他一名、安藤顧問、原田大阪支部長、などです。

間さんの御子孫の方に、伊能さんから声をかけていただく予定です。

六、その他の

催行にあたっては、これまで、忠敬ツアーや四回（第一次の旅、第七次）の旅、佐原日帰り、東京都内日帰り（おこなっているパンフレットツアーサン）に御協力いただき、内容を考えるとかなり格安に設定しています。多数御参加下さい。担当の金指（かなさし）さんが添乗します。

なお、同社では六月一八、一九日に九十九里、佐原のツアーや企画しています。（銚子犬吠崎泊、あやめ見学。渡辺が講師として同行。東京駅発 参加費二八、〇〇〇円）前回の研究会九十九里ツアーオーにお出でにならなかつた方で、参加希望の方はご連絡ください。パンフを送ります。

## アメリカ伊能大図複製への着色作業が始まる

米国議会図書館から送られてきた、伊能大図のデジタル画像が解析され、一般公開用への試作が出来上りました。紙質、大きさ、基本色調などがきまり、次の工程に入っています。左記写真は伊能アトリエにて、伊能洋さん、浅井京子さん、浅井ふみさんが三陸海岸の釜石唐丹付近の図に彩色しているところです。来年の全国公開の事前準備が本番を迎えて います。繊細な作業から、生まれ返る伊能図が楽しみです。

浅井京子さん（東京芸大卒）には六月一五日の総会で「伊能図の色彩について」と題して講演をお願いしております。

（4／9）



## 伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。  
二、つぎのような活動をおこなっております。

### ①会報の発行

発表誌 年三回以上、 交流誌 随時

### ②例会・見学会の開催

### ③忠敬関連イベントの主催または共催

### ④その他付帯する事業

### 三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入会金四千円、年会費六千円、合計一円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバスクナンバーをすべてお送りします。

送金先  
(室番が六一八に変更。乞御注意)

〒162-10822 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

郵便振替口座 〇〇一五〇一六一〇七二八六一〇

## 投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四頁～六頁です。越える場合は分載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイトルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

## 伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。最新情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.tt.rim.or.jp/~koko>

## 編集後記

○三月九日の倉敷市は青空でしたが北風が強く、気温は六度まではしか上りませんでした。時折小雪が舞いました。第16回瀬戸内倉敷ソーディマーチで「良寛コース」を20キロ歩いてきました。倉敷の南西部は玉島地区になっています。古くは源平水島の古戦場跡があり、今は水島工業地帯です。なぜ良寛さんはゴール近くで判明しました。玉島港を見下ろす小高い丘の上に行基の開基といわれる「円通寺」があり、ここで良寛が22歳から十数年間修行をした寺として有名でした。良寛堂、白雲閣にゆかりの遺墨も残されています。地元郷土史家森脇さんが「玉島円通寺の良寛さん」として本で紹介されました。その後本号の編集で越後三条が「良寛のみち」として故郷の偉人を誇りにしていることを知りました。「三条は、良寛さまがよく托鉢に来られ……自然と融合し、人の心を温め、人を真に愛した良寛さまの心は、時を越えて今もなお私たちに語りかけてきます」と。動くと出会う。(F)

# THE INOH TADATAKA JOURNAL

## STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.32 2003



INOH TADANORI'S DIARY Inoh Tadanori Diary (1)	Sakuma Tatsuo	1 4
<b>TOPICS</b>		
"Dream of the Maridian" has held in Sanjyo City	Kakimi Souichi	8
Inoh Map of Gakushuin University Opened on I Net	Saitou Hitoshi	12
New Year Visit to Inoh Tadataka Statue	Machino Sadao	16
"INOH TADATAKA's Historic Spots" Opened on I Net	Maeda Koko	22
<b>FROM VISITORS' RESISTERS</b>	Inoh Yoko	18
Please Decipher the Signs	Editorial Dapartment	20
<b>REGEONEL MATERIALS</b>		
Family Documents 23 : Kageyasu' Diary	Ando Yukiko	25
Draft of Inoh Maps In Tokyo University	Watanabe Ichiro	30
Disparity of Meridians on Inoh Maps (1)	Yoshida Masahito	34
<b>REGEONAL MATERIALS</b>		
Arrangements of the chief Inn for Inoh in Sasayama	Yokogawa Junichiro	44
Documents of Inoh Survey In Iwaki Island (2)	Ito Eiko	51
<b>MEETING ROOM</b>	Editorial Dapartment	
Inoh Survey Song		60
Dairy Topics of The Office		62
Recent Reports from Members		
New Exhibition Informations from "Inoh Tadataka Memorial Museum"		64
2003 study meeting and General meeting and Osaka Travel		66
<b>SPECIAL NEWS</b>		
America Inoh Maps Painting Started	Editorial Dapartment	68

Edited and Published  
by  
THE INOH TADATAKA SOCIETY